

# 天理大学公開講座

## 第 10 号

2017年度 / 2018年度



TENRI UNIVERSITY

## 2017(平成29)年度

## ◆ ことばと文学

第1回	絵で読む江戸時代の大和 —『大和名所図会』の世界—	西野 由紀	3
第2回	柿本人麻呂 —枕詞と序詞をめぐって—	川島 二郎	4
第3回	ことばが変化するわけ —方言からみえる変化の実態とその要因—	鳥谷 善史	5

## ◆ 天理大学公開講座 地域研究への招待

第1回	中心と周縁 —空間構造の比較文化学—	山本 匡史	7
第2回	フランス・オラドゥール村虐殺事件 —独仏和解の視点から—	中祢 勝美	9
第3回	ニューヨーク市のコリアンタウンと移民社会	魯 ゼウオン	11
第4回	世界の中の奈良、異文化から見る奈良研究の試み —ナラロジーことはじめ—	住原 則也	12

## ◆ 「大和学」への招待 - 郡山の歴史と文化 -

第1回	筒井順慶と松永久秀	天野 忠幸	13
第2回	秀長以後：郡山の近世が始まった	幡鎌 一弘	14
第3回	郡山城天守台の調査	十文字 健	15
第4回	元禄の山陵調査と細井知名	谷山 正道	16
第5回	柳沢保光と和歌	佐竹 朋子	18

## ◆ 教職員のための夏の公開講座 (後援：奈良県教育委員会)

	アクティブ・ラーニングに使えるKP法(紙芝居プレゼンテーション法)の紹介	蓬田 高正	19
--	--------------------------------------	-------	----

## 2018(平成30)年度

## ◆ 人間学で読み解く現代社会

第1回	暗夜の信仰：キリスト教神秘主義の隠れた主題とその現代的可能性	渡辺 優	22
第2回	ひとが地域の資源になる時代	谷口 直子	23
第3回	「我が事・丸ごと」の地域共生社会：これまでの10年、これからの10年	松田 美智子	24
第4回	寛容と啓蒙：異なる社会の構想はいかにして可能か？	箱田 徹	25
第5回	心とカウンセリング —よりよくともに生きるために—	仲 淳	26

## ◆ ことばと文学

第1回	漱石の文体練習 —パロディからみる〈国語元年〉—	北川 扶生子	27
第2回	和歌が物語を生み出す時 —語りと注釈の世界—	金 石哲	28
第3回	詩の100年 —制度としての近代詩—	浜田 秀	29

## ◆ 天理大学公開講座 外国語への招待

第1回	ハンゲルを学び、尹東柱「序詩」を読む	熊木 勉	30
第2回	ウクライナ語の世界	日野 貴夫	31
第3回	音の響きを楽しむ —音を使ったことば遊びについて—	山本 晃司	32
第4回	中国語の発音と漢字	阿部 慎太郎	33

## ◆ 「大和学」への招待 -郡山の歴史と文化-

第1回	郡山の幕末維新と藩主柳澤保申	柳澤 保徳	34
第2回	大和郡山のじゃんじゃん火 —怪火伝承の地域性—	齊藤 純	35
第3回	西京の土器造りと赤膚焼	山川 均	36
第4回	郡山藩と文久修陵	吉田 栄治郎	37
第5回	郡山の好敵手たち	黒岩 康博	38

## ◆ 教職員のための夏の公開講座 (後援：奈良県教育委員会)

不登校支援の基本とポイント —不登校をこじらせない取組について—	千原 雅代	39
----------------------------------	-------	----

## ◆ 一般社会人のためのスポーツ実技講座

ウエルネスウォーキング —お散歩でこの国を元気にする—	蓬田 高正	40
バドミントン 初中級編 2017・2018年度	中谷 敏昭	41

第1回

2017年5月13日

## 絵で読む江戸時代の大和

— 『大和名所図会』の世界 —

国文学国語学科 准教授 西野 由紀

江戸時代後期に流行した書物に、「名所図会」の名をもつ地誌群があります。安永九（一七八〇）刊の『都名所図会』を嚆矢として、以後、各地をとりあげた「名所図会」が多数に出版されました。一連の書物のうち、寛政三（一七九一）年に出版された『大和名所図会』はシリーズの三作目にあたります。ただし、天明七（一七八七）年刊の『拾遺都名所図会』が『都名所図会』の続編に位置づけられていることから、実質的には『大和名所図会』がシリーズの二作目にあたるといえるでしょう。では、先行する『都名所図会』ならびに『拾遺都名所図会』に対して、『大和名所図会』にはどのような特徴があるのでしょうか。

ところで、『大和名所図会』のあとがきにあたる「跋文」には、『廣大和名勝志』編纂の途中で亡くなった植村禹言の遺志を引き継ぐかたちで、その草稿にくわえ『大和志』『和州旧跡幽考』などの既存の地誌の情報を加味しつつ、本文を執筆したのだと記しています。一方で、挿絵には『都名所図会』ならびに『拾遺都名所図会』にはなかった素材が描かれています。そもそも「名所」とは「なごころ」であり、古歌に詠まれた歌枕の地をさすことばです。そのため、「名所図会」の挿絵は神社仏閣などを描く鳥瞰図が大半を占め、そこに祭礼行事を描く歳時図や当世の風俗を描く風俗図が挿入された構成となっています。

『大和名所図会』にはこれらの挿絵以外に、和歌に詠まれた風景や説話、伝説、物語などに取材した故事説話図がくわえられています。この故事説話図は『都名所図会』ならびに『拾遺都名所図会』にはみることができない挿絵なのです。以上のことをふまえると、『大和名所図会』の独自性は挿絵（とくに故事説話図）にあるといえます。

たとえば、春日野付近をとりあげた項目をみると、茶屋で休憩する客たちが鹿にせんべいをあたえているようすを描く風俗図があります。これは今日のわたしたちが抱く奈良のイメージにちかいといえるでしょう。ところが、おなじ春日野付近でも『伊勢物語』初段の垣間見のシー



ンを題材とする故事説話図もあり、その背景には物語のストーリーとは関係のない鹿のすがたが描きこまれています。つまり、物語の舞台とその土地を代表的する風物とを結びつけるような演出がなされているのです。

また、鎌倉時代の仏教史書『元亨釈書』や卜部兼好『徒然草』などに登場する久米仙人の説話を題材とする故事説話図が収載されていて、川中で足もあらわに芋を洗う若い女性のすがたを、雲に乗る久米仙人が空から眺めているシーンが描かれています。じつは久米仙人の伝説では女性が洗っているのは「衣」や「もの」と記されているのですが、なぜかこの挿絵では芋を洗っているのです。これは久米仙人の説話の舞台とその地名とを結びつけるための演出で、「妹（いも）が洗う」場所は「芋洗の芝（地名）」であるという地口による連想を読者に伝えているのです。

ほかにも、桃尾の瀧のあたりに居住していたという僧正遍昭の母にまつわるエピソードや、『義経記』や『義経千本桜』で知られる吉野の勝手神社社前で静御前が舞を奉納するシーンを描く挿絵などがあり、古典文学の作品に登場する大和のイメージをひろく読者に伝える役割を担っていました。

このように、大和の地で生みだされた和歌や説話、伝説、物語を画像化している点に、『大和名所図会』の独自性をみいだすことができるのだといえます。

## 柿本人麻呂

—枕詞と序詞をめぐる—

国文学国語学科 教授 川島 二郎

柿本人麻呂は、『萬葉集』を代表する歌人であり、後世「歌の聖」とも称されている。その名に相応しく、人麻呂の作品には様々な意匠が凝らされており、枕詞や序詞においても、人麻呂の独創を見出すことができる。

つぎに挙げるのは、人麻呂の代表作の一つである石見相聞歌の第一長歌である。

## 柿本朝臣人麻呂、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首併せて短歌

いほみ つの うらみ  
石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ  
漏なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも  
よしゑやし 漏はなくとも いさな  
とらふ 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻  
あさはふ 朝羽振る 風こそ寄らめ 夕羽振る 波こそ来寄れ  
むた 波の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を  
露霜の 置きてし来れば この道の やそくま 八十隈毎に  
よるつたび 万度 かへり見すれど いや遠に 里は放りぬ  
たか いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて  
いも かど 俣ふらむ 妹が門見む 靡けこの山

(巻二131、「一云」は略す。)

この作品には三つの枕詞が用いられている。まず、「鯨魚取り」は、人麻呂以前から用いられる古枕詞であり、「海」に冠される。古枕詞は、地名、神名、特定の普通名詞等の褒め言葉であると考えられる。「鯨魚取り」までの文脈では、石見国「角」の里に対する、人麻呂も甘んじて受けざるをえない世間一般の低い評価が、示される。そして、それに対して「鯨魚取り」以下においては、人麻呂が愛着する青々と美しい「玉藻沖つ藻」が風波に靡く海の情景が、歌われている。「鯨魚取り」は、新たな文脈の冒頭に位置し、褒め言葉である古枕詞として相応しい働きを示すべく冠されていると、言えよう。

つぎに、「露霜の」は、人麻呂のみが用いる人麻呂の創作にかかる枕詞である。掛詞に拠って石見妻を石見に



残し置く意の「置く」に冠されている。「露霜」が「置く」として妻を残し「置く」ことは、掛詞で繋がるだけであり、比喩の関係等の意味的な繋がりはそこにはない。その代わりに、「露霜」が「置く」情景がそこに歌い込められることになる。その情景とは、

ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ  
(巻四六五一)

に詠まれているような、一人寝の寒々しい情景である。つまり、石見妻を残し置き別れた後の一人寝の寒々しい情景が歌い込められていると、理解できるであろう。

さらに、「夏草の」は、これも人麻呂の創作にかかる枕詞である。比喩の枕詞であり、「夏草」が強烈な夏の日差しによって萎えてしまうことに拠って、人麻呂に残し置かれた石見間妻のしょんぼりとうち沈んでいる様を言う「思ひ萎えて」に冠される。それに加えて、「夏草」は茂りに茂る生命力の強いものであるため、人麻呂と共にあった時の生き生きとした様もそこに歌い込められていると、考えられよう。すなわち、石見妻の、人麻呂と共にある時の生き生きとした様と、一転残し置かれた後のうち沈んでいる様とが、二つながらに描かれていると言うわけである。その豊かな表現力によって、直後の「靡けこの山」という、人麻呂の石見妻への愛着が込められた「一篇の眼目」(齋藤茂吉『柿本人麿評釈篇』)と称される結びの一句を導き出すことができていると、理解できよう。今見た働きは、枕詞の役割はそれを冠する言葉を飾るものであるという本来からすれば、その役割を超えるものであると言える。人麻呂に続く歌人が、誰もこの枕詞を用いることがなかったということも、肯われるであろう。

人麻呂は、代表作と称される石見相聞歌において、古枕詞あるいは独創の枕詞を、作品の文脈に応じて、その文脈を豊かなものとするべく自在に布置していたと、言えよう。

第 3 回

2017 年 5 月 27 日

## ことばが変化するわけ

— 方言からみえる変化の実態とその要因 —

国文学国語学科 非常勤講師 鳥谷 善史

「ら抜きことば」を事例として、ことばが変化する際の実際の様子とその要因について方言調査の結果や国語学や方言学、社会言語学における研究成果の知見を踏まえながら以下の内容を講演した。

### 1. 「ら抜きことば」への社会の評価と最新の調査結果

平成 7 (1995) 年国語審議会では「ら抜き言葉は認めない」と評価されていた。具体的には「文章を書くときはふさわしくない。」「話し言葉としては許されるわけではないが、受け入れられる。」というものであった。ただ、このように社会がその変化を認めようとしなくても、ことばは常に変化を続ける。最新の文化庁の「平成 27 (2015) 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」では、「ら抜きことば」の「「見れた」(48.4%) が「見られた」(44.6%) を、「出れる?」(45.1%) が「出られる?」(44.3%) を、今回の調査において初めて上回ったという。ことばの変化には、必然性や合理性がある場合が多く、言語変化は着実に進行する。

### 2. 「ら抜きことば」とは：現象の分析

「学校文法」の枠組みを使って「ら抜きことば」について確認した。学校文法の動詞の活用には、五段・上一段・下一段・カ行変格・サ行変格の五種類があるが、その中でも上一段・下一段・カ行変格において、「可能」の意味の際に「ら」を抜いて発話される現象である。非ら抜き形(規範形)には、受身・尊敬・自発・可能の四つの意味があったが、「ら抜きことば」発生後は、可能だけが抜け、三つになり、「ら抜きことば」は、可能の意味だけを担うことになる。これは、本来一つの形式に、四つの意味があったものが減少し、可能専用の形式ができることになり、「意味の明晰化」への変化である。また、五段動詞やサ変動詞には、可能の意味には別の形式(「書ける」「できる」)が存在していたことから、全ての動詞の活用で同



じ体系を獲得することになり、「動詞活用体系の整合性」という方向への変化でもある。さらに、発話の際に「ら」を 1 拍分省略することから「省力化」も担っている。

### 3. 「ら抜きことば」発生の通時的(≒歴史的)側面

古典文法の動詞の活用は中古(平安時代)に 9 種類あったが、現代では 5 種類まで減少している。動詞活用の種類は減少傾向にある。実は、この減少の流れの中にあるのが「ら抜きことば」である。具体的には、『方言文法全国地図(GAJ)』の調査結果をみると九州地方や・近畿地方南部・東海地方に上下一段動詞を五段動詞のように活用する方言が存在する。上一段動詞「見る」では、未然形で規範的には「ミン」であるべきが「ミラン」また、命令形では「ミロ」であるべきであるが「ミレ」と発話されている。これらの現象を「一段動詞のラ行五段化現象」と呼ぶのであるが、これは、所属語彙が多く、生産性の高いラ行五段動詞に一段動詞が引っ張られる形で発話されているのである。つまり、動詞の活用が減少する方向として、遠い未来において、一段動詞も五段動詞のようになる可能性を示唆している。

### 4. 「ら抜きことば」進行の遅速の地域差の要因：共時的側面

四国	北陸	中国	北海道・中部	九州	東北	近畿	関東
40.5	38.6	37.5	32.6	28.5	26.8	20.8	16.7

『平成 13 年度 国語に関する世論調査』の「こんなにたくさん食べられない/食べれない(地域ブロック別)」の調査結果は、表のとおりである。この調査結果からその進行の遅速の要因として、進行の遅い、関東・近畿に注目すると、それらの地域が旧首都であったり首都を含む地域であるという共通の要素がある。このことから変

化を遅らせる要因として「規範意識の高さ」が考えられるが、「3.」で見た「ラ行五段化」という側面からは、九州や東北の変化の遅さが説明できない。ただ、これに関しては、言語変化の要因としては、言語そのものが合理的方向に変化しようとする「言語内の要因」と言語以外のそれを使う人間の心性などの「言語外の要因」が複雑に絡み合いながら変化に影響を及ぼしていることがわかっている。そこで、九州や東北には、変化を遅らせる「言語内の要因」が存在するのではないかと考え、再度方言分布を確認すると「可能」の意味には「能力可能」と「状況可能」といった下位分類があり、地域によりその形式が異なることがわかった。具体的には、東北地方日本海側では能力可能では「キレル」であるが、状況可能では「キラレル」という形式で使い分けしている。「キラレル」の「ラ」が抜けると意味の使い分けができなくなるため結果的に「ら抜きことば」の進行が遅れたことがわかる。九州でも同様の事例が存在する。このことから、言語変化を遅らせる「言語内の要因」として「可能形式の使い分け」があったことが確認できる。これらのことから、ら抜きの進行を遅らせる言語外の要因としては「規範意識の高さ」が一番強く働いていることが確認できる。

## 5. 言語変化のメカニズム

(誰がことばを変化させるのか? : 年齢差と性差)

	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代
男性	62.5	60.0	66.7	71.4	81.8	84.8	88.8
女性	30.8	37.5	42.1	63.2	80.9	90.5	94.0

井上文子(1991)の調査結果「大阪市内「生え抜き」の「起きれる」の使用率」の表を詳細に確認すると、言語変化(「ら抜きことば」)を引き起こした属性が、男性であることがわかる。その根拠は、男性の使用率が全体的に高く、徐々に増加しているからである。また、若い女性が急激に使用率を増加させたのは、「ら抜きことば」を新しい規範形と感じたからである。男女差としては、個人差はあるものの、概して女性の方が言語感覚に優れ、保守的である。そのため、若い女性たちは、自身の周囲で多く使われ始めた「ら抜きことば」を規範的に感じ始めたのである。

## 6. 「ら抜きことば」使用上の注意

前章でも確認したが、新しい言語変化の場合、年齢が下がるにつれその使用率は上がり、年齢が上がるにつれ使用率は下がる。ただ、これまで見てきたように「ら抜きことば」は言語変化として極めて合理的な変化である。また、歴史的必然性を帯びている。だからといって、今すぐその使用を心がけるべきではない。世代差があることをしっかりと理解し、その形式を状況によって使い分けるべきであろう。不適切な場所や場面として、話しことばとしては、採用面接、会議など。また、書き言葉としては、論文、履歴書、仕事上の顧客との遣り取りのメールなどの公的場面があげられよう。また、問題なく使える状況としては、友人や家族との日常会話及びメールやツイッター、Lineなど、ソーシャルネットワークサービスの私的な書きことばでは、まったく問題がないであろう。長寿社会ゆえ、規範性を大切に、「ことばの乱れ」と感じている方々も多くおられることを認識しておくべきである。

なお、『枕草子』186段や『方丈記』22段にも、新しい言葉遣いや表現への恨み言が記されている。

### 【参考文献】

- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波新書  
 井上文子 (1991) 「男女の違いから見たことばの世代差」『月刊日本語』4-6  
 真田信治編 (2006) 『社会言語学の展望』くろしお出版  
 渋谷勝己 (2006) 「可能」『方言文法調査ガイドブック』大西拓一郎編  
 竹田晃子 (2006) 「読むことができる〔能力可能・状況可能〕」『月刊言語』35-12、大修館書店  
 竹田晃子 (2007) 「可能形式の使い分けと分布」『日本語学』26-11、明治書院  
 松丸真大 (2006) 「見ない、見ろ」『月刊言語』35-12、大修館書店

第 1 回

2017年6月3日

## 中心と周縁

—空間構造の比較文化学—

地域文化学科 教授 山本 匡史

わたしたちが日常生活をいとなんでいる生活空間、つまり都市や村落はさまざまなかたちをしています。それはもちろん地形や環境などの自然条件により制約をうけるものではありませんが、そこにはわれわれが文化をとおして育んできた世界の見かたや捉えかたが反映されています。本講座では、わたしたちの身近にある生活空間の作られかたを、具体的な事例をつうじて一緒に考えてみたいと思います。

まず、こちらの航空写真をご覧ください（図 1）。日本の典型的な村落共同体のひとつなのですが、多くの村落と同じようにこちらにもいわゆる氏神さまを祀っている神社を有しています。さて、この村落の神社はどこにあるのでしょうか？ またいっぽう



図 1 京都府亀岡市旭町



図 2 サン・アンドレス・ミシュキック（メキシコ）



で、日本から太平洋を隔てたメキシコの村落を例に考えてみます。この航空写真は首都メキシコ市の近郊にある農村です（図 2）。ここでは基督教（カトリック）が信仰されていて、日本の村落の神社と同じようにカトリックの教会が共同体の精神的拠り所となっています。果たして、この村の教会はどこにあるかわかりますでしょうか？

それぞれの村落共同体の神社や教会はこちらの図に示されているように、日本では村落から離れた山の上なのに対してメキシコでは村落の中心といったぐあいに、ずいぶん異なっています（図 3）。それでは、なぜこのような違いが出てくるのでしょうか？ それは、それぞれの地域の人たちが「カミ」「ヒト」「自然」をどのように位置づけているかによって異なってくるのです。

つまり日本では（もちろん災害や天変地異はありますが）基本的には自然は人間に恵みをもたらしてくれる対象であり、カミは通常は山や杜のなかにおいて自然と人間の媒介をしてくれる存在であると位置づけられています。これに対してメキシコの場合は基督教がもとになっているわけですが、そもそも基督教が発祥したパレスチナ地方では自然は人間に恵みをもたらすどころか、生命にかかわるほどの脅威をおよぼす存在となっています。したがって、そこではカミはヒトを自然の脅威から守護する存在として、生活空間の中心に配置されているというわけだけです（図 4）。

それでは、日本では都市や村落の中心にはなにがあるのでしょうか。たとえば奈良や大阪の街の中心といえ、どこにあたるのでしょうか。おそらくは多くの都市は駅を中心に栄えているといえるのではないのでしょうか。また鉄道が通る以前や、現在でも鉄道が通っていない村落などでも街道沿いが中心となっている場合が多いように思われます（これに対して、メキシコだけでなくカトリックをベースとする都市では駅や街道は街はずれにあることが多いです）。

ここから、もうひとつの空間にたいするわたしたちの指

向が読み取れます。鉄道にせよ街道にせよ、わたしたちが空間の中心に据えているものはいずれもわたしたちを外部の世界へといざなう装置であるといえるでしょう。すなわち、わたしたちの視線はつねに外側へ向いたベクトルとして意識されることとなります。こうして育まれたのが借景という考えかたです。街を見る視線はおのずと外部へと向かい、背景にある山並みなどを取り込んだ造景 (landscape) を作りあげていったのです。

このように、わたしたちが日常を過ごす生活空間が、実はじぶんたちの世界観 (カミとヒトと自然の関係など) にもとづいてデザインされているかがわかりいただけましたでしょうか。おそらく同じような地形や自然条件の土地であったとしても、文化によってはそのデザインのしかたはずいぶん違ってくることでしょう。いかにしてじぶんたちを取り巻く世界を捉え、整理してゆかかという方法論、それこそが文化というものなのだと思います。

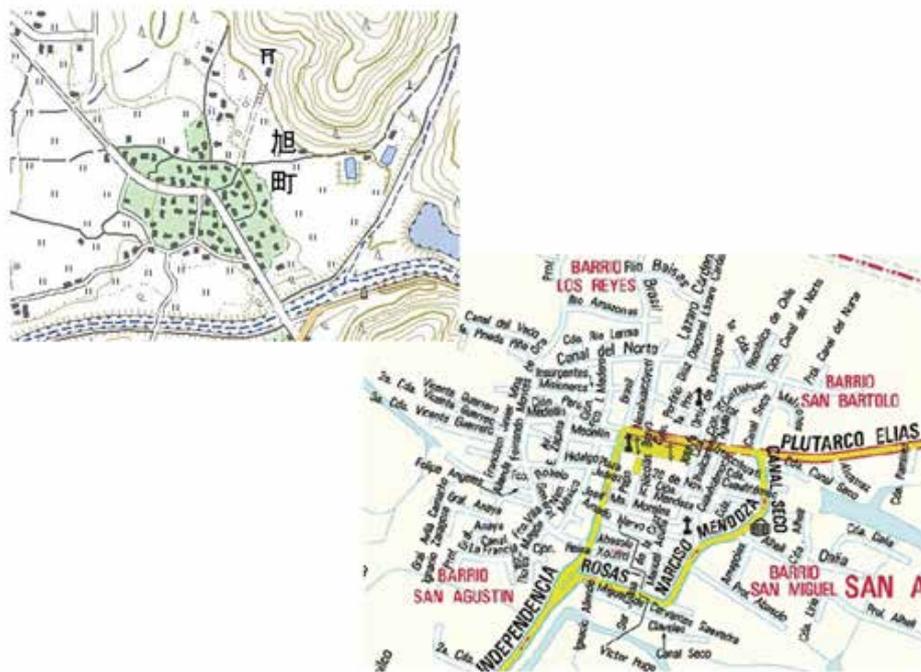


図3 神社 (旭町) と教会 (ミシュキップ) の位置関係

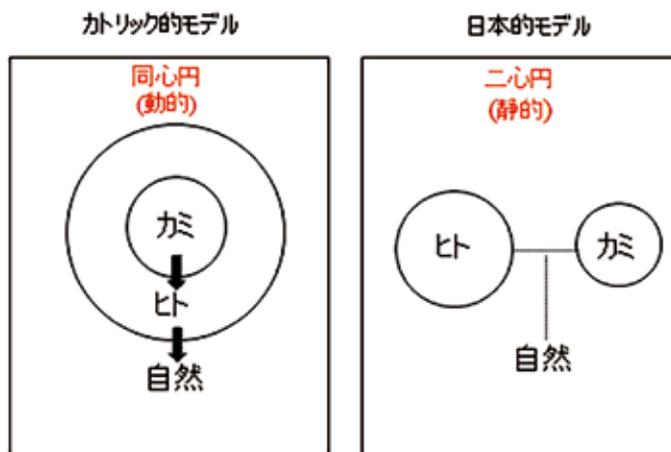


図4 カミ・ヒト・自然の関係

第 2 回

2017 年 6 月 10 日

## フランス・オラドゥール村虐殺事件

— 独仏和解の視点から —

地域文化学科 准教授 中祢 勝美

ユダヤ人、ジプシー、同性愛者、障害者など 600 万人の命を奪ったナチスによるホロコースト（大量殺戮）の主な舞台がドイツ以东だったことは広く知られていますが、フランスでも全村民の惨殺を企図した悲劇が起きました。今回の講座では、日本であまり知られていないこの事件を振り返るとともに、戦後の裁判における問題点や独仏の歴史的和解の意義について考えてみました。

事件はきょうからちょうど 73 年前の 1944 年 6 月 10 日に、フランス中部、リムーザン地方の小さな村で起きました。夏の陽射しが照りつける午後 2 時頃、ナチスの武装親衛隊（SS）の兵士約 150 人が突如現れ、村を包囲・封鎖すると、身分確認にかこつけて全村民を広場に集合させます。1 時間ほど後、まず女性と子どもが教会へ、続いて男性が 6 つの納屋に別々に連行され、午後 4 時頃、1 発の銃声を号令に、教会と納屋で一斉射撃と焼き討ちが開始されたのでした。

教会では 207 人の子どもを含む 452 名が犠牲になりました。ただひとり奇跡的に生還した女性の証言によれば、ドイツ兵は一斉射撃をした後、まだうめき声が聞こえる人の山の上に藁や柴を投げ込み、火を放ったそうです。炎と煙に包まれた教会は炉の内部のように高温になり、溶けた鐘が天井もろとも床に落ちました。一方、6 つの納屋に押し込められた 190 名以上の男性のうち、炎と銃弾をかいくぐって生還できたのは僅かに 5 人。オラドゥール事件の犠牲者の総数は 642 名ですが、実は正確な数字が確定するまで 2 年近くかかっています。身元確認ができた遺体は犠牲者全体のたった 8% しかありませんでした。オラドゥール事件の特異性は、何と言っても凄惨なその手口にあるのです。

背景として見逃せないのは、連合軍によるノルマンディー上陸作戦（6 月 6 日）の数日後に事件が起きた点です。戦局を決定づけた同作戦は、駐仏ドイツ軍の危機感を募らせる一方、対独レジスタンスに身を投じたパルチザンの士気を俄然高揚させました。事件の 2 日前、チュー



ルという町でパルチザンに急襲されたドイツ軍は多数の兵士を失いましたが、南フランスに司令部を置いていた第 2SS 装甲師団「ダス・ライヒ」は、翌 9 日、ノルマンディーに北進する途上、チュール市民に容赦なく報復しました。オラドゥール村が標的にされたのも、民間人に恐怖（＝テロ）を覚えさせることでレジスタンスの氣勢を削ぐ狙いがあったとする「見せしめ説」が近年の研究では有力です。

戦後、村はド・ゴールの意向で廃墟のまま保存されることが決まるなど、早くからナチスの野蛮さの象徴として国民に共有される記憶となりました。しかし、1953 年のボルドー裁判では、虐殺を計画・指揮した将校が一人も出廷せず、事件の真相が解明されるどころか、21 名の被告のうち、1940 年にドイツに併合されたアルザス地方の出身者が 14 名含まれていたことが判明して大いに物議を醸しました。彼らは、志願して武装 SS に入隊した 1 名を除き、自らの意思に反して強制召集された「マルグレ・ヌ」の青年たちだったからです。裁判の結果、「同胞」の殺害に加担したアルザス出身者には 5 ～ 7 年の禁固刑が下されましたが、この判決には、当然ながらアルザスの市町村長たちから怒りと抗議の声が上がります。オラドゥール側もこの判決には激しく反発しました。判決結果が生存者や犠牲者遺族にとって信じられないほど軽微だったからです。事態を憂慮したフランス国民議会は、激論の末、判決の一週間後に特別法案を可決し、13 人の「マルグレ・ヌ」に恩赦を与えて釈放しましたが、この措置は完全に裏目に出ました。オラドゥール村は、国家とのすべての関係を断絶すると宣言し、国家が墓地に建てた納骨堂に犠牲者を葬ることさえ拒否したのです。村とフランス政府の断交状態は、20 年以上続きました。

独仏の和解を象徴する場面といえば、ド・ゴールとアドナウアーが和解を誓ったランス大聖堂でのミサ（1962 年）と、ミッテランとコールが手をつないだヴェルダンでの第一次世界大戦戦没兵合同追悼式典（1984 年）がまず想起されます。独仏首脳が見せた和解のパフォーマン

スは、たしかに両国民の集会的記憶として定着していきましたが、オラドゥール村は別でした。国家レベルで和解が進んでも、ドイツの元首がオラドゥールを訪れることはありませんでした。

こうした経緯を踏まえると、2013年9月に実現したドイツのガウク大統領によるオラドゥール訪問は、村にとって、独仏両国にとって、そしてEUにとって歴史的な訪問だったと言えます。この訪問は、1995年から19年間村長を務めたフリュジエ氏の、「誰かが行動を起こさないと何も変わらない」という信念に基づくものでした。ドイツ側との交流を少しずつ広げてきた村長は、生存者や犠牲者遺族会の理解と信頼を築き、独仏友好条約（エリゼ条約）が50周年を迎えた2013年2月、自らドイツ首脳の来訪を打診したのです。

2013年9月4日。この日、フランスのオランド大統領とともに村に招かれたガウク大統領は、まず生存者エブラスさんの案内で廃墟の村をじっくり歩いて回りました。女性と子どもが惨殺された教会では、両脇から挟むようにエブラスさんの手を握る両大統領の姿がありました。墓地で花輪を捧げ、犠牲者遺族会の人々と言葉を交わした後、オランド大統領に続いてガウク大統領が演説を行いました。その演説で私が注目したのは以下の3点です。

1. ナチ時代のドイツ人が犯した犯罪の道義的責任は今のドイツ人にもあるとの認識を示した点。
2. 和解の意思を示し、初めてドイツの元首を受け入れてくれたことへの深甚の謝意を表明した点。
3. オラドゥールの人々の苦悩に共感を寄せつつも、戦後生まれのドイツ人が、ナチスとは違う国を作ってきたこと、他の国と協調しながら平和で民主的なヨーロッパを作ろうとしてきたことを強調していた点。

狭隘なナショナリズムがもたらした地獄と、そこから和解にたどりついた独仏。両国の関係・交流から、私たち日本人が参考にすべき点は多いのではないかと思います。

第 3 回

2017年6月17日

## ニューヨーク市のコリアンタウンと移民社会

地域文化学科 教授 魯 ゼウオン

本報告の目的は、ニューヨーク市のコリアンタウンを取り上げ、韓国系米国人の移民社会の現状とその意味を現地調査の資料をもとに、日本社会との比較の視点から検討することである。

ここでの韓国系米国人とは、1965年の移民法改正以降、移民として米国へやってきた韓国出身の移民者とその子孫たちを指す。韓国系米国人の多くは、家族経営の独立系の自営業を営みながら、大都市を中心にコリアンタウンを形成した。韓国系米国人の定着が進むにつれて、安定的な定住層や移民 1.5 世や 2 世が台頭してきた。こうした韓国系米国人は、コリアンタウンを中心に多種多様な民族組織を形成し、民族コミュニティのなかで生活してきた。しかし、1992年のロスアンゼルス暴動の際に、白人警官と黒人との葛藤が原因で黒人がコリアンタウンを攻撃するという経験を通じて、米国社会の人種間の葛藤という構造的な問題に韓国系米国人も関わっていることを自覚し始めた。この認識をもとに、ニューヨーク市の韓国系米国人は、他の移民集団との共存関係をもとめて、移住先の社会への参加を模索した。そこで注目されるのが、ニューヨーク市のコミュニティ委員会という市政参加制度である。コミュニティ委員会は土地用途変更や都市計画等の審議機能をもっており、ローカル社会の地域自治を行う場である。そこで、筆者はコリアンタウンにおけるコミュニティ委員会を取り上げ、①新着移民者地区 (Flushing)、②安定した移民者地域 (Bayside) の 2 つの地区における韓国系委員の活動に注目し、数次にわたる現地調査を実施した。その結果は以下のとおりである。

第1の新着移民者地区では、1名の移民1世女性、2名の移民 1.5 世男性が韓国系委員として活動している。女性委員 (60 歳代) は韓人会長の経験をもつ韓国系移民団体の役員である。男性委員 (20 歳代～30 歳代) の職業は弁護士と有権者運動家で、高学歴でかつ専門職に就いている。この地区は移民者が急増しているが、委



員会の中心メンバーは白人住民であり、移民者役員は消極的に関わっている。韓国系委員は委員会と韓国系移民団体とのネットワークの役割をもっているのである。

第2の安定移民者地区では、移民1世女性 (70 歳代) と韓国系移民団体所属の移民 1.5 世の女性 (30 歳代) が活動している。韓国系委員は土地計画の情報をいち早く知ることができることを委員会のメリットとして挙げている。安定移民者地区においても、韓国系委員は何かを提案するというより、会議に参加する程度の活動に止まっている。

要するに、ニューヨーク市の韓国系米国人は、コミュニティ委員会という市政参加制度の周辺的な担い手であると捉えられる。韓国系委員はローカルな社会と韓国系移民社会との媒介の役割を担っているが、今後委員を経て地域政治へ進出しようという新しい動きに注目すべきである。この事例は、アジア系移民者が社会参加の経験を積んで、その後に政治へ参加しようとする移民統合の一例を現わしている。こうした移民都市の事例は、日本社会にどのような意味をもつのか。1990年代以降、日本の地方自治体は多文化共生政策を掲げて、「外国人諮問会議」という一種の参加制度を創設している。また、在日外国人の定着が進むにつれて、生活者の立場から地域組織である町内会や自治会に参加しようとする外国人も増えている。ニューヨーク市のコミュニティ委員会は行政予算と土地利用に関する権限をもっている点で、移民者は移住先の社会に溶け込むルートと捉えている。いいかえれば、移民都市ニューヨーク市の事例は、地方自治体の都市内分権の進展は、生活者としての外国人居住者の社会参加を促進するということを示唆している。今後、人口減少時代を向かえた日本社会が外国人居住者をどのように受け入れるのか、とりわけ地方自治体における自治の力量が問われるといえよう。

第4回

2017年6月24日

## 世界の中の奈良、 異文化から見る奈良研究の試み

—ナラロジーことはじめ—

地域文化学科 教授 住原 則也

奈良という地は、異文化の視点を入れることに、歴史的ないわれがあります。古代ヤマト政権以降の奈良の歴史とは、国内外の異文化との交流を通じて新しい制度や文化が形成されてきたのであり、それが日本社会や文化の遠い源流となりました。現代の奈良の「伝統文化」とか「自然の景観」と言われるものも、実は、国内外の複数の異文化が対面し交流しあう中で醸成されてきたものである、と言えるのではないのでしょうか。古代の奈良には、日本の各地から人々が集まっていたこと、さらには、「シルクロードの東端」と呼ばれるように、遠く大陸からも渡来人がやってきて在住し、日本人と交流しながら活躍していた地であること、異論のない歴史的事実です。

ひるがえって、現代日本を見ると、各地に海外からの人々を日常的に見かける昨今となっており、日本にいても世界の人々と交流する時代になっています。これはまさに、かつての奈良がそうであったように、新しい文化や社会のあり方が少しずつ日本に形成されようとする素地ができつつあるものと解釈してもいいのではないのでしょうか。ナラロジーとは、奈良という地の単なる地域研究ではなく、異文化間の交流がもたらすダイナミズムの事例・好例を探し出す試みでもあります。異文化間で広く交流することにより、お互いが未来に向かって、適切に変わってゆかなければならないということに気づかされるものと思われる。

そのような意味で、ナラロジーは、単に奈良を歴史的に見るというものではなく、歴史を振り返りながら、眼差しは現代と未来に向けられています。形成されてきた伝統文化が、なぜどのように残されてきたのか、現代にどのように活かされているのか、あるいは解消されてきたのか、などを、文化、社会、自然、産業などあらゆる分野を対象として検証したいと思います。

現代の奈良各地を見ることはまた、少子高齢化、過疎化、後継者不足、など広く日本がかかえる諸問題をも見ることができ、同時にそれらの問題を改善しようとする様々な試行錯誤も目にするすることができます。それら新しい



試みも、国内外の様々な文化を参考にしているはずで

このように、ナラロジーとは、奈良の長い歴史と現代の地域を、異文化間の交流という視点から、縦横無尽に見なおそうとするものです。そして、日本人の眼だけから見る異文化交流ではなく、今現にそこにいる海外から来ている人々の眼からも、奈良を見ようという試みです。そうすることで、奈良の新たな魅力も、また意外な価値も発掘されるかもしれません。

日本人だけが定義する奈良像ではなく、また、異文化の人々が一方的に感じるだけの奈良像でもない、両者が心を開き交流しながら形成される新たな奈良像というものもあっていいのではないのでしょうか。

奈良を愛し、異文化に寛容な方なら、「ナラロジー研究」の同志として歓迎します。

### ナラロジーの目指す視点と射程

0. 「文化は異文化間交流の産物」＋「奈良を学ぶことは日本と世界を学ぶこと」  
世界を学ぶこと＝①世界の様々な見方を知る。  
②普遍的な現象として学ぶ。
1. 異文化間交流がもたらした奈良の姿  
(社会・文化・景観)：古代からの歴史的検証
2. 異文化の目を通して見えてくる、現代の奈良の価値の再発見を目指す
3. 文化・伝統の残し方、活かし方、消し(消え?)  
方という普遍的な課題を奈良の事例から学習
4. 奈良の諸社会問題(少子化、高齢化、過疎化など)  
や解決・改善に向けての取り組みを現代社会の普遍的な問題として学ぶ

第 1 回

2017 年 9 月 30 日

## 筒井順慶と松永久秀

歴史文化学科 准教授 天野 忠幸



### 戦国時代の和を代表する二人のイメージ

鎌倉・室町時代を通じて、大和を代表する権力は、興福寺であった。しかし、戦国時代末期、武力で大和を平定しようとする者が現れる。それが興福寺の下に結集する大和武士の棟梁である筒井順慶と、足利将軍を京都より追放して畿内の覇権を握った三好長慶の重臣である松永久秀であった。

しかし、順慶は明智光秀と羽柴秀吉が戦った山崎の戦いで、洞ヶ峠に陣取り、日和見的な態度に終始したという逸話がある。また、久秀も、主家の三好一族を謀殺し、将軍足利義輝を暗殺するだけでなく、東大寺大仏殿を焼討にしたとされる。

こうした不名誉な逸話は江戸時代に創作され、実際には証拠がなかったり、戦国時代の古文書を見ると、明らかに否定できたりする。そうした両者の実像を見ていく。

### 順慶と久秀はなぜ戦ったのか

永禄二年（一五五九）、久秀は大和に侵攻する。その理由は従来、単なる領土的野心としか考えられてこなかった。当時の順慶は若年のため、河内の畠山氏、特に重臣の安見宗房との連携強化により、その危機を乗り越えようとしていた。ところが、そうした時に、三好氏と安見氏が対立したため、順慶も巻き込まれることになったのが実像だ。

久秀の大和入国は、大きな衝撃を与えた。多くの筒井家の家臣が順慶を見放し、久秀に寝返ったのだ。それだけでなく、興福寺までもが、久秀を大和武士の棟梁と認めてしまった。順慶にとって、自らの権力基盤を根こそぎ奪い取った久秀は、絶対に倒さねばならない相手となった。

### 京都・中央政権との関係

三好氏が京都を支配している時は、久秀が圧倒的優位に立った。しかし、三好氏が内紛を起こすと、順慶は三好三人衆と、久秀は足利義昭や織田信長と同盟を結んだ。久秀は義昭と信長の上洛を援護し、娘を信長の息子と結婚させるため遣わした。それに対し、順慶は信長に降伏すら認められず、厳しい立場に追い込まれた。

そうした状況が急展開するのが、元龜二年（一五七一）

であった。義昭は自分の部下を増やそうと独断で順慶を味方にした。これに怒った久秀は義昭や信長から離反する。順慶は中央政権との繋がりができた千載一遇の好機を生かし、辰市の戦いで久秀を破って大勝利を収めた。

その後、義昭と信長が対立する中で、久秀は居城の多聞山城を明け渡すという捨て身の条件を提示し、信長も服属を認めざるを得なくなった。一方、順慶は信長に厚遇され、縁戚関係を結び、やがては大和の支配を任せられた。こうした流れが強まる中で、久秀は信長に背き、信貴山城に籠城するが、敗れて自害した。

信長は明智光秀らの大軍を大和へ派遣し、その軍事力を背景に検地と破城を断行して、順慶を支援していくことになる。

### 城郭配置から見た大和支配

久秀は奈良に多聞山城を築き、信貴山城（平群町）、沢城（宇陀市）、筒井城（大和郡山市）、十市城（橿原市）などに城主を派遣して支配した。特に多聞山城は高層建築、白壁の塀、黒瓦、障壁画などの存在が、キリスト教宣教師の史料だけでなく、『柳生文書』でも確認されており、近世的な城郭の先駆けとなった。作事を行った彫刻師や絵師は安土城にも動員されており、影響を与えた。多聞山城は信長によって解体されるが、文禄三年（一五九四）に豊臣秀吉に再建を指示されるなど、後世にも影響を及ぼした。

それに対して、順慶は信長より郡山城を与えられる一方、筒井城も含め他の城は破壊するよう指示されている。当初、筒井城には多聞山城の石が運ばれたが、低湿地で地盤が弱く、近世的な城郭への改修は難しかったようだ。そのため、郡山が大和一国の支配拠点と定められた。

### おわりに

戦国末期の大和は、侵略者の松永久秀と守護者の筒井順慶という二項対立的な視点では割り切れない。両者は中央政権の強い影響を受ける点で、共通の課題を抱えており、中央政権に作られた大和国主という面を有していた。しかし、正面から奈良に対抗する久秀に対して、奈良に代わる新都心をつくる順慶という枠組みは、奈良奉行と郡山藩という形で江戸時代に受け継がれていく。

## 秀長以後：郡山の近世が始まった

歴史文化学科 教授 幡鎌 一弘



17世紀前半における上方の大名配置を見渡してみると、譜代大名最大の30万石の近江国彦根藩（井伊家）と、15万石の譜代大名である播磨国姫路藩・大和国郡山藩が、政治・経済の中心である京・大坂の2大都市を取り囲むように配置されている。このこと一つをとってみても、郡山は江戸幕府の上方支配、とりわけ軍事的に重要なポジションにあったことがうかがえる。今回は、そのようなまなざしで郡山の近世史を検討してみた。

そもそも、大和国の近世の扉を開いた豊臣秀長は、天正13年（1585）に姫路から郡山へやってきた。播磨国・大和国は、大坂を拠点とする豊臣秀吉にとって重要な領国だった。

秀長は、入部後すぐに郡山・松山・高取の三城体制を作り、寺社に対して保護と統制を織り交ぜて支配し、自らの権力を高めていった。城下町を整備するために力を尽くし、寺社の礎石までもかき集めて城を築き、家臣屋敷を整備し、住民組織として箱本制度を導入した。多武峰大織冠鎌足公を郡山に移した最初の思いは、都市に不可欠な要素としての宗教性を求めたからだったと思われる（あわせて秀長の病気祈祷の意味を持つようになる）。堺と奈良の間の流通線上の地の利を生かして、市の発達を促した。奈良で長年培われた文化も郡山に移してきた。天正16年（1588）、毛利輝元一行を郡山に迎えたとき、奈良の町人・春日社祢宜の演じる能によって接待したことなどは、きわめてよい例である。

羽柴秀保時代も秀長の諸政策は引き継がれた。増田長盛が大和に入ると、支配を固めた秀長・秀保旧臣との関係が難しくなるが、「国守護」という立場で検地や行政を行った。増田長盛支配期に起こった慶長伏見地震で郡山城の天主が崩壊した可能性があるが、この破損がどの程度で、長盛がどのように対応したかはよくわかっていない。

関ヶ原合戦後、西軍側の大名は改易され、大和国には福島・織田など東軍の豊臣・織田系の大名・旗本領が設

定された。大和国は豊臣方・徳川方の領地が交錯して、双方の緩衝地のようになった。城を受け取るため、藤堂高虎・本多正純が郡山に来たが、その後、城主は置かれなかった。豊臣方との緊張を避ける意味があったのだろう。大和国の国奉行だった大久保長安が郡山周辺の幕領を管理しており、郡山町との関係も継続していた。その一方、豊臣方に近い勢力が郡山にいたようであり、筒井正次が郡山城を預かるようになったにもかかわらず、大坂冬の陣の際、徳川家康は郡山を素通りし、小堀政一に郡山の様子を内偵させている。

慶長20年（1615）、大坂夏の陣の時、水野勝成は大和国の大名・旗本の組頭として道明寺の戦いに勝ち、戦功によって郡山城を与えられた。大阪の陣後、平時へスライドしていく際、郡山を水野勝成に与えて大和国に影響力を及ぼすことに、大きな意味があった。

郡山城は、水野・松平忠明によって整備されていった。元和5年（1619）、徳川秀忠が尼崎城に続いて郡山城を検分したのは、城作りと何らかの関係があっただろう。寛永6年（1629）に松平忠明がはじめた2割半無地高増政策と同じことは、寛永8年（1631）に岸和田藩松平康重も行っており、両者とも城と城下の整備は重要な課題だった。無地高増政策は、慶長6年に播磨国で池田輝政が行ったのが最初で、これも姫路城の築城と関係する。池田家のあと姫路に入った本多忠政もその政策を引き継ぎ、寛永16年（1639）、松平忠明と本多政勝が姫路と郡山の領主を交代したのちも、無地高増政策は本多・松平両家の政策として継続していくことになった。

第 3 回

2017 年 10 月 14 日

## 郡山城天守台の調査

大和郡山市教育委員会 十文字 健

平成 25 年から始まった天守台の調査によって、謎が多かった郡山城の実態が明らかになりつつある。調査成果をもとに遺跡としての郡山城の姿に迫りたい。

### 県指定史跡 郡山城跡

郡山城は丘陵端部に築かれた平山城で、天守台がある本丸を中心に内堀・中堀・外堀に囲まれた惣構えの構造をとる。現在みられる城郭の骨格は豊臣期に整ったとされる。城郭の中心部には堀や石垣が良好に残存し県史跡に指定されているが、発掘調査が少なく考古資料の蓄積はあまりない。

### 天守台展望施設整備事業

天守台は付櫓台が取り付く複合式の形態をとる。自然石を積み上げた石垣には「逆さ地藏」や「伝・羅城門礎石」など特徴的な転用石材をみることができる。近年は孕み出しが進み、周辺への立入が制限されていた。そこで遺跡の保全と共有を目的に同事業が実施された。事業に伴って測量、土質調査、石材調査、史料調査など様々な調査をおこなったが、中でも大きな成果を得られたのが発掘調査である。

### 天守台の発掘調査

発掘調査では礎石を確認し、幻とも言われた天守が実在したことが初めて明らかになった。良好に残存する礎石からは天守1階の構造を推定することもできる。付櫓台では地階を構成する石垣を検出し、当初の入口の位置が明らかになった。これらの成果から、築城時は天守へは①付櫓台南面の入口から付櫓地階に入り、②付櫓の上階にあがり、③天守南側にある付櫓との連結部分から天守に入る、という動線だったことがわかる。また、石垣基底石の設置工法が天守台と付櫓台とで異なっていたことも判明。上部の構造によって石積み工法を使い分けたとみられ、当時の施工技術の実態がわかる。

天守礎石上面からは豊臣期大坂城と同範の軒丸瓦や聚楽第に類例のある軒平瓦など 16 世紀末の瓦が出土し、天守の年代は豊臣期であることがわかった。周辺からは



金箔瓦も出土し、天守を飾った屋瓦の絢爛な様相が判明した。

### 石垣の解体

石垣の解体範囲は必要最低限として、石材も原則同じものを使用した。全体の約 13%にあたる 209 石が解体対象となった。解体に伴い天守台の内部構造が判明。天守台はすべて盛土でつくられ、石積み・土盛り・裏込流入を交互に繰り返したことで盛土と裏込の境が鋸歯状になっていた。これは築城時の状態が良好に残っていることを示している。盛土内には砕けた瓦が大量に含まれる部分があり、注意を引く。

内部には石垣を背面から押し出した状態が認められず、石積みだけが変形していたことがわかった。「逆石」や「団子積み」といった現代は避ける石の使い方、築石の割れ、間詰石の抜け落ちなど様々な要因が重なった結果の孕み出しと考えられた。しかしながら、約 400 年にわたって大きく損壊しなかった石垣を築いた当時の技術水準の高さは改めて評価されるべきだろう。

### 郡山城の天守台

多くの調査の結果、郡山城の天守台は豊臣期の遺構であり、残存状態も良好であることが明らかになった。同時期の天守に関わる遺構は全国的にも資料が限られており、城郭の構造や築城技術の変遷を考察する上で重要な遺構である。出土資料の分析がまだ途上だが、礎石の設置年代は文禄～慶長初頭に限定できる可能性が高くなってきた。この時期は秀保の名護屋からの帰陣や伏見慶長の大地震など築城の画期となるような出来事が続く。今後も慎重に検討を進めて年代の特定につとめたい。天守は関ヶ原の戦い後に解体されたと考えられる。解体後の遺構の状況からは天守なき後の天守台が江戸時代を通じて丁寧に維持管理されたことがわかるが、城郭の中で天守台がどう位置付けられていたのかも興味深い問題である。天守台の分析をさらに進めることで、郡山城の変遷や織豊期から近世にかけての城造りの実態が明らかになることが期待できる。

## 元禄の山陵調査と細井知名

歴史文化学科 元教授 谷山 正道



徳川綱吉が将軍であった元禄期に、幕府の命によって山陵の調査と治定、普請が行われました。本講義では、この事業の実施背景について述べるとともに、大和国内の実施の有様について、奈良奉行所の与力であった玉井定時が書き残した『元禄十丁丑年 山陵記録』などの記載をもとに、以下のような内容構成のもとに話しました。

はじめに

### 1 元禄という時代

- ① 「民勢さし潮の如し」
- ② 将軍綱吉の政治

### 2 荒廃する山陵と心ある人々の嘆き

- ① 荒廃する山陵
- ② 山陵の有様と心ある人々の嘆き

### 3 細井知名による建言と山陵調査の実施

- ① 事業実施についての建言
- ② 事業の実施

### 4 奈良奉行所による大和国内の山陵調査

- ① 奈良奉行所による山陵調査の実施
- ② 山陵見分の様子と治定の実際  
— 「景行天皇陵」のケースを中心に—
- ③ 周垣普請の実施と終了報告

おわりに

—元禄期に実施された山陵の調査・普請の限界性—

当日は、それぞれの内容について、資料をもとに詳しく話しましたが、以下にはその骨子のみを記しておくことにします。

元禄期には、経済成長をベースに町人を中心とした文化が開花しましたが、この時期に山陵調査が実施されるようになった背景には、国学の勃興によって歴代の天皇の治蹟のみならず山陵への関心が高まるようになったこと、将軍綱吉が儒学の教えにもとづいて「礼」の秩序を重んじ朝廷を尊重する政策を進めるようになったこと、などがあげられます。こうした状況のもとで、諸陵の荒廃を嘆き、各山陵の所在地を明らかにするとともに、修補しようとする気運が生じるようになりました（これに関して、松下見林の『前王廟陵記』や、細井知慎の『諸陵周垣成就記』の記載内容を紹介しました）。

元禄の山陵調査は、元郡山藩士であった細井知名（延宝7年〔1679〕から貞享2年〔1685〕まで郡山藩主であった松平信之に仕え、藩主の転封に伴って下総国の古河へ移った後、元禄6年〔1693〕に致仕して浪人となっていました）の建言によるもので、その意見は、元禄10年〔1697〕に、知名の弟で当時柳澤吉保の儒臣となっていた知慎から、柳澤吉保（当時、綱吉の側用人で老中格）を通して将軍綱吉に上申されたものでした。細井兄弟の熱意は柳澤吉保を動かし、さらに吉保の尽力もあって、将軍綱吉を動かすことになったのです。自分の提言が幕府によって容れられたことを知った細井知名は、病床にあって手を合わせ、「聖君」（綱吉）と「賢佐」（吉保）に深謝して感涙を流しましたが、事業が実施される直前にこの世を去りました（享年42歳）。

本事業は、幕府から朝廷への打診と、「誠以叡感不斜」としてこれを歓迎する朝廷からの回答をふまえて、同年9月から実施されることになりました。山陵のうち、大和国内の33陵については、奈良奉行所が担当することになり、次のような手順で調査が進められていきました。

○京都所司代からの指令・・・元禄 10 年 (1697) 9 月 7 日夜、奈良奉行(内田守政)へ大和国内の山陵(33 帝)の調査を実施するように指示した、京都所司代松平信庸からの「書帖」が到来。

○担当役人の任命・・・9 月 9 日、与力の玉井与左衛門・中条太郎右衛門を「御陵諸事吟味役」に任命、翌日に 2 名(与力羽田新五衛門・坂川武右衛門)を追加。

○大和国内各郡村々に対する問合せ・・・廻状により、山陵の所在地や伝承についての回答を求める。

○絵師の派遣・・・村々からの回答をもとに、絵師三郎左衛門を現地に派遣し、現状の絵図を作成させる。

○14 陵の由緒覚書・絵図の提出・・・9 月 26 日、神武・綏靖・安寧・懿徳・孝霊・開化・垂仁・成務・顕宗・武烈・聖武・称徳・後醍醐の各天皇陵と神功皇后陵の分を京都所司代に提出。このあと、不明の 19 陵についても報告。

○各山陵の实地調査・・・11 月から 12 月にかけて、チーム分けして実施。

以上のような形で、大和国内の各山陵についての調査と治定が行なわれていきましたがその実際の有様について、「景行天皇陵」のケースを取り上げて紹介し、郡も異なる山辺郡上総村の「王墓山」に決定されるに至る経緯と、幕末の修陵時に「景行天皇陵」として治定されることになった式上郡渋谷村の「向山」(渋谷向山古墳)が、元禄の調査に際しては候補にも上らなかった事情について述べました。また、「湮没して其跡もさだかならず」(『徳川実紀』)とされるに至った「崇神天皇陵」(「山辺道勾岡上陵」)や、「塚山」(現「綏靖天皇陵」)に治定された「神武天皇陵」、高松塚に治定された「文武天皇陵」のケースについても言及しました。

続いて、本事業において実施された各山陵の周垣普請のあり方について、以下のような流れに沿って述べました。

○担当役人(与力・同心ら)から奈良奉行へ起請文を提出(元禄 11 年〔1698〕1 月 29 日)→「垣之積絵図」などの作成→竹垣造成工事の入札の実施(2 月 6 日)→垣の仕様を立垣から菱垣に変更(2 月 20 日)→奈良奉行所が 20 陵、代官大柴清右衛門が 7 陵、同石原新左衛門が 2 陵、同金丸又左衛門が 1 陵の普請をそれぞれ担当することを決定(3 月 6 日)→「聖武天皇陵」を皮切りに 3 月 18 日から工事に着手→5 月 19 日までに完了(奈良奉行所担当分は 4 月 28 日までに終了、なお当奉行所担当分の普請に関わる惣入用は 10 貫 40 匁 6 分 1 厘)→京都所司代へ関係帳簿を提出するとともに、工事の終了報告を行なう(8 月 5 日)。

徳川光圀は、『皇陵志稿』のなかで、「元禄の修陵、その喜びは自ら禁じ得ず。(中略)実に空前絶後の大事業なり。(中略)元禄の修陵、これ歴史上の一角を占断して、雄視するに足るべき尊王史上の一大偉業なり」と述べ、本事業を高く評価しています。しかし、そうは言えない点も、本事業には存在していました。山陵の治定は、しっかりと裏付けのもとに行なわれたわけではなく、山陵の普請も墳頂部に竹垣を廻らすというレベルに止まっていた、幕末に実施された「文久の修陵」時のそれとは大きな落差がありました。

「文久の修陵」時に畿内の陵墓の巡検を行なった戸田忠至(「山陵奉行」に任命された宇都宮藩の家老)は、目にした山陵の有様について、「御陵之頂ニ麦作其外作物ヲ仕付、養ヒ之為メ不浄ヲ掛、又は御陵ヲ破リ御石棺暴露仕候所も許多有之、御陵之上ニ庶人之墓所有之候処も相見へ、或ハ御石棺中へ水溜リ候御場所も有之、絶言語甚以奉恐入候御模様ニ御座候、右は全ク下民之心得違ヲ以開墾仕候義ニも無御座、御領・私領年貢地ニ相成居リ候由、村役人申聞候、一体御陵ヲ年貢地ニ仕候義、筆端ニも難述不敬之次第と奉存候」(『山陵修補綱要』)と記しています。このような光景が、元禄期に実施された本事業を経ても続いていたのです。

## 柳沢保光と和歌

柳沢文庫 学芸員 佐竹 朋子

本講座は、柳沢保光が、誰からどのように和歌を学んでいたのか、学んだ和歌をどのように活かしていったのかについて検討することで、保光が和歌に取り組んだ意義について明らかにすることを目的とする。

これまでの研究において、柳沢家は、吉保・吉里・信鴻・保光の4代にわたって和歌に秀でていたことが指摘されている（福井久蔵『諸大名の学術と文藝の研究』厚生閣、1937年）。また、宮川葉子氏（『柳沢家の古典学（下）一文芸の諸相と環境一』（青簡舎、2012年）は、吉保・吉里が取り組んだ和歌について具体的に明らかにした。米田弘義氏（『大和郡山藩主 松平（柳沢）甲斐守保光一茶の湯と和歌を愛した文人大名 堯山』（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会、2013年）は、保光について、赤膚焼を再興し、和歌に始まり茶道・華道・盆石・俳句など、様々な学芸に優れた大名であったことを明らかにした。ただし、以上の研究では、江戸時代の大名が和歌を詠むことは、漢詩同様一般教養として必要なこととの認識が前提であるため、柳沢家の当主が和歌に取り組んだ意義についてまでは論じられていない。

ところが、吉保から保光までの柳沢家当主が取り組んだ和歌を概観すると、吉保と吉里、信鴻・保光とでは、和歌に取り組む目的に違いがあったことがわかる。すなわち、吉保・吉里は、北村季吟から古今伝授を受けたこともあってか、霊元院から詠草への添削を受けることができ、霊元院や霊元院歌壇で活躍した公家と和歌を通じた交流があった。つまり、吉保・吉里が和歌に取り組んだ意義とは、和歌を通じて、霊元院へのルートを確認できたことにある。吉保は大老格ではあったが、一代で成り上がった新興大名でもあった。そのため、霊元院と、和歌を通じたルートがあるということは、他の大名家にはない柳沢家独自の強みになったのである。

では、信鴻・保光が和歌に取り組んだ意義とはどこにあったのか、本講座では、保光の和歌への取り組みに注目して、当財団が所蔵する保光の公用日記である『虚白堂年録』や歌学書などをもとに、第1章から第4章におい



て検討を行った。

まず、「1. 柳沢保光の履歴」では、保光は、宝暦3年（1753）4月4日に誕生し、父は柳沢信鴻、母は松代藩主真田信弘息娘輝子であったことに始まり、文化14年（1817）に死去するまでの履歴について紹介を行った。続いて、「2. 冷泉家へ入門」では、保光は、和歌を家業とする公家冷泉家へ入門したが、安永3年（1774）7月、師匠である冷泉為村が死去したことで、冷泉家門を離れたことを説明した。

「3. 日野家へ入門」では、冷泉為村亡き後、和歌を家業とした公家日野資枝へ入門し、寛政9年（1797）には『三部抄』の伝授を受けていたことについて検討した。すなわち、『三部抄』の伝授とは、御所伝授でいうところの、第二階梯三部抄伝授にあたることから、保光は、日野資枝から、御所伝授の第二階梯まで伝授されていたことが明かである。つまり、保光は、当時、最高ともいえる和歌の教育を受けていたのである。

最後に、「4. 柳沢保光と和歌を通じた交際」では、保光は、公家へ入門して学んだ和歌を、武家の世界において、どのように活かしていったのかについて、検討を行った。

保光は、和歌を家業とする公家へ入門する一方、大名が開催する和歌会に参加するなどして和歌を研鑽していった。そして、安永10年（1781）1月13日、保光が詠んだ和歌が、後桜町院の勸覧に浴したことで、当時の武家社会において歌人として認められたと言える。また、第11代將軍徳川家斉の御台所である薩摩藩主島津重豪娘茂姫の和歌と書道の師範となったことで、島津家との縁ができた。そして、保光の孫である保興と島津重豪の末娘淑子とが婚姻関係を結ぶに至ったのである。

以上から、保光が和歌に取り組んだ意義とは、保光が和歌に秀でることで、柳沢家は和歌に秀でた家として武家社会において際立ち、引いては、家の安定を保つことへも繋がったことにあると言える。

2017年10月14日

## アクティブ・ラーニングに使える KP法（紙芝居プレゼンテーション法）の紹介

体育学部 講師 蓬田 高正



KP法のKとPは、「紙芝居」と「プレゼンテーション」の頭文字をとったものであり、キーワードを手書きした何枚かのA4用紙をホワイトボードなどにマグネットを使って貼りながら行うアナログ型のプレゼンのことです。

近年学校現場で取り入れている先生方も多くいらっしゃいます。そこで今回はKP法のいろはと実際にKP法によるプレゼンをやってもらいたいと思います。

### 1. KP法（紙芝居プレゼンテーション法）とは

<p><b>KP法とは</b> 紙芝居プレゼンテーション法 Kanshibi Presentation 法</p>	<p>シンプルに伝える プレゼンテーション法 同時に思考整理法</p>	<p>何を伝えるのか 何を考えるのか 課題は何なのか</p>	<p>整理して 伝わりやすく 構造化すると</p>	<p>KPの1セットは 10~15枚程度 2~4分程度</p>
<p>KP数セットで 数十分のプレゼン 構成</p>	<p>KP法の基本 は シンプル</p>	<p>話したいを書く 書きたいを話す</p>	<p>話し 効果的に伝える ためには 次の3点が大切</p>	<p>言葉を選ぶ 情報を絞り込み捨てる 構成しデザインする</p>
<p>対 パワーポイント プレゼンテーション</p>	<p>シンプルな構成 →記憶に残る 手書きの表現 →熱が伝わる</p>			

### 2. KP法の3つの使い方

<p><b>KP法</b> 3つの使い方</p>	<p>KP法の命名は 2008年 注もと前が済んだ</p>	<p>① ワークショップの 作業手順説明 (1990年代)</p>	<p>② グループ実習の 発表手法として (1990年代)</p>	<p>③ シンプルな プレゼンテーション手法 として (2000年代)</p>
<p>例・話し合うテーマ ・終了時刻 ・発表方法など 覚えている必要がある</p>	<p>短時間の発表準備 要点が絞られていて 分がわかりやすい</p>	<p>話し合いの成果を 1枚KPシートに キーワードを書き発表</p>	<p>口頭で発表 模造紙にまとめる KP法・パワーポイント</p>	<p>傾示されない 時間・労力・ デザイン力が必要</p>

3. なぜ伝わらないのか？

何故「伝わらない」のか？	情報量が 多すぎる	何が要点なのか 分からない	記憶に残る形 に ポイントが 残っていない	自分の言葉 に なっていない
関係性が できていない				
例えば	プレゼン ーションは <u>KISS</u> ぞ	Keep It	Simple Sharp	いつも 単純に 鋭く

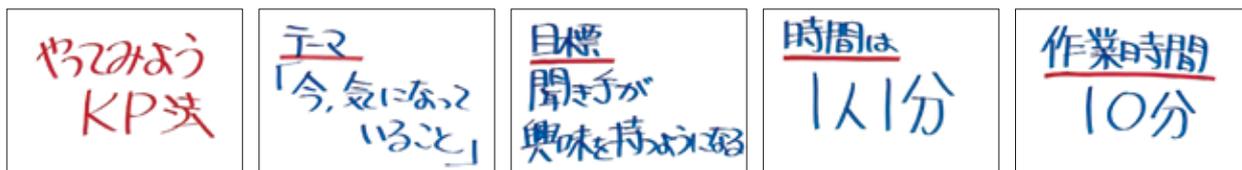
4. マーカーで書いてみよう

マーカーで 書いて みよう		漢字は大き ひらがなは小さ	10人程ならこの位の字 20人程ならこの位の字 30人程ならこの	と2も読みやすい色 と2も読みやすい色 と2も読みやすい色 と2も読みやすい色
まあ読みやすい色 読みやすい色 読みやすい色 読みやすい色	自己紹介 タイム	名前 所属 この講座に期待	5分作業	1人1分

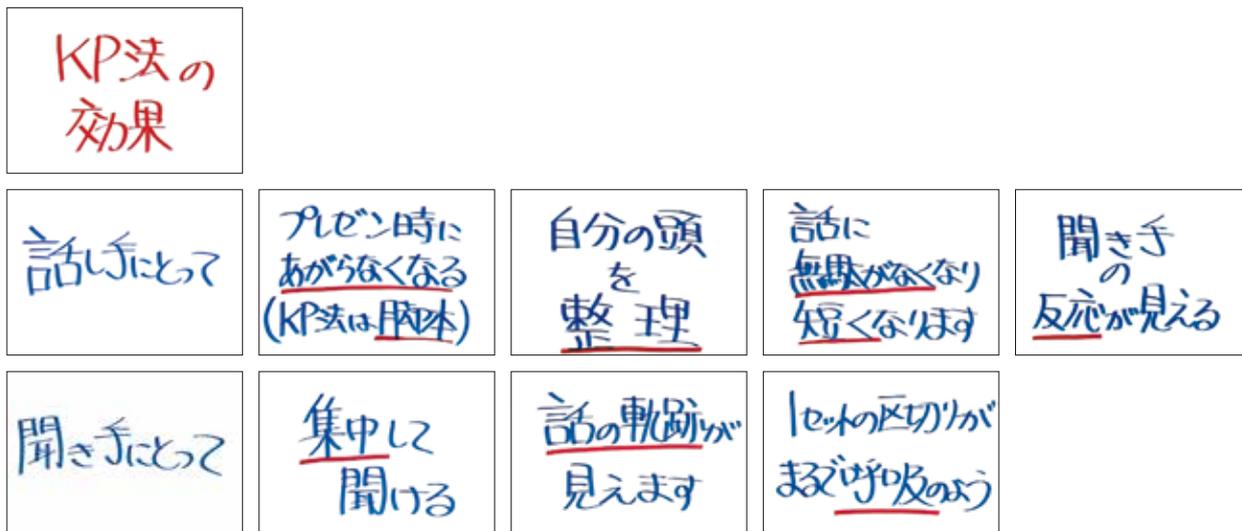
5. アクティブラーニングとKP法

アクティ ブラーニングと KP法				
教師にとって	授業の 時間短縮の ために	ポイントを 絞り込み しかり記憶に残す	10~15分ご KPは終了 あとは指示だけ	伝えたい 情報の整理 の方法
生徒にとって	グループ作業の 発表の方法 として	グループの 合意形成 の方法として	皆が参加できる シンプルな 発表手法	自分(たち)の 思考を整理 する方法

6. やってみよう KP 法



7. KP 法の効果



【引用・参考文献】

川嶋直 (2013) : KP 法—シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション—. みくに出版

川嶋直・皆川雅樹編集 : アクティブラーニングに導く KP 法実践—教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法—. みくに出版

第1回

2018年5月19日

## 暗夜の信仰：キリスト教神秘主義の隠れた主題とその現代的可能性

宗教学科 講師 渡辺 優

「信仰」を論点に現代社会を問うとき、二つの対極的な側面が浮かび上がってくる。一方では脱宗教化・脱信仰の側面が、他方には宗教復興・信仰回帰の側面が認められる。

まず、脱宗教化・脱信仰の側面について。現代社会においては「宗教」や「信仰」という言葉に好ましくない響きを感じる人が増えている。日本では、とくに1995年のオウム真理教事件の後、宗教の信仰は、個々人の思考の自由を束縛するもの、他人（教祖、権威）任せにして自分の頭で考える力を奪うものと批判された。現代社会における信仰の困難は、信仰者にとっては信仰の空虚感として味わわれてもいる。「目に見えない神、沈黙する神を信じて何になるのか」という、素朴だが堅固な疑いを抱く現代人は少なくない。

現代社会においては宗教の内／外を問わず、信仰のリアリティを感じにくくなっていると言えるだろう。

他方、現代には宗教復興・信仰回帰の時代という一面もある。たしかに、1960年代以降の宗教社会学理論では、「近代社会において宗教は衰退する」という世俗化論が広く受け容れられていた。しかし、1970年代のアメリカの宗教復興やイラン・イスラム革命によって、世俗化論は根本的な再考を促されることとなった。

現代では「原理主義」の台頭も顕著である。産業文明の恩恵に浴する現代人の誰もが多かれ少なかれ感じている「不安」に訴え、そこからの「信仰の飛躍」を促す決断主義は、一定の説得力をもち、現に多くの人びとの心を捉えている。そして、「飛躍を遂げた」信仰者（原理主義的信仰者）にとっての信仰は、批判の余地のない絶対的なリアリティをもたらすだろう。

私としては、これからの人間社会における信仰のゆくえを考えるに、「脱信仰」か「信仰回帰」か、という両極とは別の道を探りたい。それは、宗教の内／外を問わず、「信仰」についてわたしたちの考え方を鍛えなおすことでもあるはずだ。このような見通しのもと、本講演ではキリスト教神秘主義の伝統に伏流する「暗夜の信仰」論の一端を

紹介する。

「暗夜の信仰」は、16世紀スペインの神秘家十字架のヨハネに淵源する。ヨハネによれば、真の信仰を抱く者の神との交わりは、本来「暗い夜」の中にある。彼は、感覚的体験（目に見えるもの）への執着を厳に戒めた。たしかに、この夜の中にあつては、魂は神の姿を見失い、あるいは神に見棄てられたと考えて絶望に突き落とされる。しかし、見えざる神の姿を求めて焦がれる魂の内に燃えさかる「愛」の焰を、ヨハネは語る。

この暗夜の信仰の系譜に属する三人の神秘家として、スラン（17世紀）、リジウのテレーズ（19世紀）そしてマザー・テレサ（20世紀）がいる。彼・彼女らはいずれも、神の姿を見失う魂の暗夜を彷徨った者たちであり、その暗い信仰の道行きの途上で魂に深い愛の傷を負った者たちであり、「飛躍」するのではなく、悲惨さと弱さが渦巻く地上を這いつくばるような信仰を生きた者たちであった。

信仰の暗さは、「明晰判明なるもの（evidence）」を真理の基準とする近代社会においては、たんにネガティブな暗さ（愚かさ、空虚さ）として退けられがちである。このような傾向は、「神秘体験」という証拠を得て初めて「確かな信仰」を得るといふ、オウムへの入信者たちに繰り返してみられるパターンにも窺える。「悩める私」「煩惱まみれの私」「弱い私」を否定して「強い私」「真正な私」になることを可能にする体験と、体験に支えられ、さらなる体験を求める信仰。このような信仰は、実のところ近代社会の産物でもあるのだろう。

しかし、人間の本来的な弱さを引き受け、自らの苦しみについて他の誰にも責任転嫁することなく、孤独な魂の夜を戦い抜く道——別様の信仰の道——を歩んだ者たちがいたことを忘れてはならない。そのような道を歩んだ者たちの証言は、信仰の夜の「明るさ」を教えてもいる（サン＝テグジュペリの証言）。それぞれに孤独である魂に、しかし通奏低音のごとく響く暗夜の信仰論は、夜を照らす夜の「光」を考えさせもする。



第 2 回

2018 年 5 月 26 日

## ひとが地域の資源になる時代

人間関係学科 講師 谷口 直子



企業経営における経営資源とは「ヒト・モノ・カネ・情報・ノウハウ」等があげられる。それらの経営資源のなかでも、「ひと（人的資源）」が果たす役割は大きい。企業では「人は財産（人財）」という言葉があるほどだ。では、地域社会における資源とは何だろうか。

地域社会で営む組織は、企業とは大きく異なる。大きな差異は、フラットであること、そして金銭的なつながりが希薄であることがあげられる。そのような組織の中では、企業経営以上に「ひと（人的資源）」の果たす役割が大きくなる。人の出会いやつながりが社会関係資本（Social Capital）を作り出し、地域をよくするための公共的な活動を行うのである。

本講座では、主体的にまちづくりを行う「地域公共人材」にスポットを当てて、人が学びあうことが地域社会にどのような影響をあたえるのかを考えた。

### (1) 社会の変化と地域コミュニティの現代的課題

近年、資本主義の後退に伴い、少子高齢化社会など社会の課題に対して、これまで行政に任せきりであった「まちづくり」を、住民が自ら参画することを求められるようになった。このような社会改革に市民が取り組まなければならなくなった社会的背景には、経済中心に舵を切ってきた戦後の政治に根源があると考えられる。今日的課題の少子高齢化や過疎化は、高度成長期に組み込まれた社会システムが後年に強い影響を与えた結果であるといえよう。それは、まるで、戦後復興の材木不足により人工的に植林された杉や檜が現代人に「花粉症」をもたらしたようなものである。

### (2) 「新しい公共」と地域公共人材

2009 年～2012 年に政権与党となった民主党が唱えた公共事業の見直し「新しい公共」は政治の賛否はさておき、それまで行政が担うべき「公共」を地域の様々な主体である住民や組織を新たな公共の担い手として期待するという、発想の転換であった。お互いに支え合う活動を行う理念によるもので、誰もが「市民」とあるという意識を持って「まちづくり」に参画するというは画期的な考え方であった。この理念は、現自民党政権にも「一億総活躍社会」

へと引き継がれている。

「地域公共人材」の例として徳島県神山町、美波町、上勝町や京都府和束町、南山城村、また、ある映像作家の活動が生み出す社会関係資本などの先進的な事例を紹介しつつ、これからの社会に必要とされる地域の公共に資することができる人材の生き方や、そこから得られる人生の豊かさを検証した。

### (3) 「ひと」こそが社会の資源

地域公共人材となる人の利他的な生き方が作り出す「場」とは、企業社会のように経済的利害によって成立するのではなく、様々な人が出会い、融解して、「我と汝」の関係が「我々」の関係へ進展することで成立するのである。（清水博『場の思想』東京大学出版会 2003）地域社会における場の生成は、清水の論理により、説明することができる。この「場」における資源とは「人」のほかない。

### (4) まちづくりは共創作業

企業社会で一時、取り上げられた共創（co-creation）は企業の壁を越えた創作作業のことであり、営利企業による利他的な調整として話題になった。しかし、利害関係の調整がうまくすすまずに、いつのまにか立ち消えた。一方、地域社会における共創は、そこに住む人がお互いの共生を求めて行う作業であり、その利害関係の調整は、企業社会よりも困難である。

### (5) 大人の学ぶ力を高めていくために

有名なマズローの欲求 5 段階説では、生理的欲求、安全の欲求、帰属の欲求、承認欲求の上に、自己実現の欲求があり、さらに自己実現を超えた上位の欲求が「隣人愛」や「地域愛」であると言われている（社会へのベクトル）。人は学ぶことで、欲求の階段を一段一段とあがり、その先には、多の人とコミュニケーションをとり合い、「場」をつくり、個人を超えた成長段階にさしかかる。それは、人の人生を豊かにする生涯教育・生涯学習の考え方にも通じる。地域が育つということは、人の学びあいや経験値のもとで蓄積されるものであって、その資源は「ひと」そのものである。

第3回

2018年6月2日

## 「我が事・丸ごと」の地域共生社会 ：これまでの10年、これからの10年

人間関係学科 教授 松田 美智子



2025年に団塊の世代が後期高齢者となる超高齢社会において、わが国はどのような対応策を考えているのか、私たちにできる準備は何か本講座で考えていくことを目的とする。

自身のこれまでの10年を振り返り生じた生活上の変化を振り返り、今後10年に生じるであろう生活上の変化を予測してみる。自身や家族のみでセルフケアやサポートが可能なことばかりではないことが容易に推測される。「住まい・健康・生活支援・地域社会・助け合い」といったキーワードから、国が目指している「1億総活躍社会」(生産性を保持しつつ安全・安心な社会の創設)の具体的施策について「地域包括ケアシステムの構築に向けて」また「健康長寿への挑戦」を中心に解説し、自分のこととして「私たちに求められていることは何か・私たちにできることは何か」共に考える。

当面、高齢者数が多い社会である我が国では、老化に伴って生じる生活障害や健康障害への対応策を模索しながら展開している。高齢者のみを対象とするのではなく、老いも若きも、障害を有する人もそうでない人も、小さな子ども達も含めて、皆が安心して安全に共に生きる社会の構築に向けて、「健康長寿への挑戦」「助け合い社会(ケアリング)の醸成」に向けて、どのような心身の状況になっても、住み慣れた地域社会で地域社会の一員として安全・安心に暮らし続けるためには、私たちに何ができるか提案してみた。

人は古来から集団で知恵を絞って様々な困難に立ち向かってこんにちまで繁栄してきた。日本社会では従来から自助(セルフヘルプ・自分のことは自分で)を基本として、共助(互助・助け合い・社会保険制度)や公助(公によるサポート)のシステムを活用してきた。高齢者が多くなると、いずれ自助には限界が来る場合が多い。一方でセンテナリアン(100歳以上の健康長寿者)は最多を更新している。健康寿命を伸展させるために個人や社会がで

きることは何か、センテナリアン研究や関連領域での先行例をあげて解説した。

在宅療養が当たり前となりつつある現状で、自らの健康生活を守る努力は不可欠である。しかしながら全て社会保障で賄うには限界があり、「ちょっとした助け合い」「困った時に頼れる存在」がいることで、地域社会での自立生活は継続できる。自分が生活する地域社会をどのように発展させるかを主体的に考えること。行政を上手に活用してQOL(生活の質)が高い生活を維持していくための支え合いの社会に、自らはどのように貢献できるのか? 具体的に考え、備えておくことが求められる。また共に生きる・支え合いの社会では、支援される者と支援する者が共に役割交代が可能な社会でなければ継続しない。ケアする者こそ最もケアされなければならない存在であり、ケアする者が適切なケアを受けていれば、ケアの質は向上する。また人はケアという助け合いや支え合いの中から、互いに成長発達する存在である。

生きていく上での生活課題を他人ごとと捉えるのではなく、自分にも生じ得る我が事と捉え、人の一生に生じるであろう様々な生活上の支障への対応を分断することなく切れ目ない・漏れない支援体制(丸ごと)の整備に向けて、社会福祉学の立場から解説・対応策を提言した。21世紀・超高齢少子社会で市民としてたしなんでおくべき「支え合いの人間学」の課題について論じた。

第 4 回

2018 年 6 月 9 日

## 寛容と啓蒙：異なる社会の構想は いかにして可能か？

総合教育研究センター 准教授 箱田 徹

地球温暖化や環境破壊、戦争、移民と難民の急増、経済社会的な不平等の爆発的拡大といった事態は、自然と人間を平然と使い捨てつつ、自己責任の呪文を唱えて「成長」してきた資本主義に、自己修正の契機がもはやないことを示唆している。これに対抗するかたちで、既存のシステムの持続不可能性に対する「否」の動きが、世界各地で爆発的に拡大している。他方、こうしたなかで、ひとつの政治的争点を形成するのが「寛容」である。

この言葉には政治的な曖昧さがある。歴史的に見ると、批判的な力を持つことも持たないこともあるためだ。そもそも複数の社会集団間で寛容が問題になるときは、否定的な関心がはたらいている。寛容は、政治権力をもつ側が、自分とは異なる他者をどう受容するかという態度と不可分であり、その度合いも、共存を妥協的に認知する段階から、倫理的に価値ある存在と双方が見なしあう段階までさまざまだ。他方で、差異に基づく寛容の強調は、本質主義的なアイデンティティ観を招きうるし、支配的な差別や憎悪を結果的に認めることにもなりかねない、といった有力な批判もある。

しかしそれでも寛容を今日の民主主義の要にすべきだという議論もある。たとえば R. フォアストは、寛容とは合法的な体制への批判や不服従にも説明の場を与えることで、立憲国家を発展させる契機を生み出すことができるとしたうえで、生まれつきの技術ではないからこそ、寛容の技術は市民がみずから養うべきものだと言及。ここでフォアストが強く意識するのは、M. フーコーの統治論だ。フーコーは I. カントの「啓蒙とは何か」を受けた、同一題のテキストで、啓蒙の問いとは現在が岐路にあるという認識と不可分であり、そこからさらに進んで、みずからをどのように統治するのか、という「自己の統治」の問いに通じていると論じていた。

わたしたちはつねに「岐路にある」からこそ、みずからが置かれた諸条件から出発して、どのような道を歩むのか



をみずからの意志で選ぶ可能性をもつ、とフーコーはいう。カントならば、啓蒙は自動的に展開するのではなく、各人が「勇気を出して」選び取るべきオプションだということだろう。そのためには、出発点である「現在」についての時代診断が不可欠だ。みずからがどのような統治の体制、「他者の統治」のもとにあるのかを知らなければ、自己を統治することはできないからだ。

今日よく言われる、多様性の尊重も、かけ声だけでは資本主義による人間と自然の破壊も、さまざまな少数者への暴力も止められず、それを正当化する方向にも機能する。したがって寛容をめぐる問いは、立憲国家の更新である以上に、今とは異なる社会の構想へと接続される必要がある。こうした状況の下、統治論から捉え返された啓蒙概念には、今とは異なる多数の「私たち」をいかにつくりだすかという問いを提示する点で、寛容をラディカルに開くヒントがあるだろう。

第5回

2018年6月16日

## 心とカウンセリング

—よりよくともに生きるために—

総合教育研究センター 教授 仲 淳

表題の連続講座の第5回目として、「心とカウンセリング—よりよくともに生きるために」というテーマで、人の「心」というものと心のケアを行う「カウンセリング」という営みについて、講義とワークを交えて、講演を行った。

講演の前半は、受講者の方々にワークシートを使って考えていただいたり、実際にバウムテストという心理テストを受けてもらったりしながら、「心」というものについて理解を深めていただき、後半は「カウンセリング」の基本的な理論の解説とグループワークを通して、わたしたちがともによりよくつながりながら生きていくためにはどのようなあり方が求められるのかということ、実感的につかんでいただけるように努めた。

前半のまずはじめに、「心」という目に見えないもののイメージをつかむために、受講者の方に「心」という文字の入っている言葉をあげてもらい、そのうえで筆者が調べてきたたくさんの「心」という字の入った言葉をスライドで提示して、「心」というものがいかにわたしたちが生きることに直結した大切なものであるのかということの説明した。

そして次に参加者の方に「心」というものはどこにあるのか?ということについて考えていただき、「心」というものには「我が心」だけではなく、わたしたち人間を包み込む「大いなる心」というものが存在している可能性があるということ指摘し、筆者自身の経験にも触れながら、「心」というものの広がりについて解説を行った。

続いて、カウンセリングや心理療法では、「心」を持ったそれぞれの人を「かけがえのない一つのLIFE(いのち)」だととらえていくという視点を提示して、その一つ一つのいのちが進んでいく道のことを、ユング(Jung,C.G.)という学者は「自己実現」と呼んでおり、一つ一つの「心」もそれぞれに固有な「自己実現」のプロセスを進んでいく可能性があるということ説明した。また、エリクソン(Erikson,E.H.)のライフサイクル理論の概説も行って、



人の「心」が成長し、展開していく道筋について、理解を深めていただいた。

そして前半の最後に、各自で「実のなる木」を描くバウムテストを体験していただき、参加者のみなさん自身の現在の心のあり様について、感じていただける時間を設けた。

後半は、カウンセリングとは、「話を聴いて、その人の中にある『心の自己治癒力』を引きだそうとする営みである」ということをまず説明して、カウンセリングの原理は「おしゃべり」と同じであること、抱えきれない「重い思い」を「話す」ことは心の苦しみを自分の心のうちから解いて「放す」ことであり、悩みを「言える」ことが心の傷が「癒える」ことにつながっていく可能性があるということ、フロイト(Freud,S.)の精神分析の考え方を紹介しつつ、解説した。また、カウンセリングが効果を持つのは「心の共鳴」の力による可能性があることを説明し、よりよく人の話を聴いて受け止めていくためには、相手の心に寄り添っていく「共感的態度」と、上から目線にならない「相手をリスペクトして下から理解しようとする(understand)姿勢」が大切であることを指摘した。

そして、「徹底的に個を尊重する」カウンセリング的なふれあいとかかわりが、それぞれの人の「自己実現」を促し、より深く人と人をつなげて、よりよい人間関係とよりよい社会づくりに役立つ可能性があるということをお伝えして、最後に受講者のみなさんに4人一組のグループに分かれていただき、中井久夫氏が考案された、白紙の紙を複数の線で区切ってできたそれぞれのマス目に順番に色鉛筆で好きな色で塗っていくという「交互色彩分割法」を行っていただき、和気あいあいとした楽しい雰囲気の中で、「ともにいまここにある」というカウンセリングの基本的人間関係を体験していただいた。

第 1 回

2018 年 6 月 16 日

## 漱石の文体練習

—パロディからみる〈国語元年〉—

国文学国語学科 教授 北川 扶生子



### 1. 文体改良の時代

明治時代にはさまざまな新しい習慣が始まりました。言葉も例外ではありません。今の書き言葉のスタイルは、110 年前ほど前にだいたい出来上がりました。帝国主義体制のもと、日本は急速な近代化を迫られました。鎖国が終わり、海外から大量の情報が入ってきます。義務教育の普及によって、読み書きできる人が増えます。また、活版印刷術が導入され、大量に速く印刷できるようになります。大量の情報を、いかに多くの人に、いかに早く、いかにわかりやすく伝えるか、ということが新しい時代において重要になりました。そこで、誰もがたやすく読み書きできるように、日本語を改良することが提唱されたのです。

### 2. 新文体創設をめぐる試行錯誤① —学者の場合

しかし、新しい文体をつくるのは、簡単なことではありませんでした。言葉というのは皆が共有するものなので、誰かひとりが新しい形をつくっても、それが行き渡らなくては残りません。明治時代の新文体創設の動き——言文一致運動は、知識人や啓蒙家がリードした運動でした。彼らは様々な新しい日本語をつくりました。たとえば、言語学者の三宅米吉は、ひらがなだけの新文体を考案しましたし、日本学者のバジル・ホール・チェンバレンは、ローマ字による文体を提唱しました。しかし、これらはいずれも根付きませんでした。

### 3. 新文体創設をめぐる試行錯誤② —小説家の場合

新しい日本語文体を創り出すにあたって、大きな貢献をしたのは、小説の文体でした。二葉亭四迷、森田思軒、山田美妙は、それぞれに新文体を工夫しました。なかでも二葉亭の文体が、新しい日本語に大きな影響を与えました。

### 4. 言葉の混乱期を楽しんだ人たち —齋藤緑雨と夏目漱石

こうした試行錯誤の一方で、混乱期を楽しんだ人たちもいました。明治時代の批評家・小説家の齋藤緑雨は、当時活躍していた代表的な作家たちの文体を見事なパロディにして、その特徴を浮き彫りにしています。夏目漱石も、「吾輩は猫である」「虞美人草」などで、諸文体やそのパロディを、小説の世界を牽引する力として駆使しました。

### 5. 新文体創設と近代国民国家

言文一致体の完成、識字率の上昇、活版印刷の導入と鉄道の整備によって、日本中どこにいても同じ新聞や雑誌をみんなが読んでいる、という世の中がやってきました。自分だけではなく国中の人が同じ新聞を読んでいる、そう思うことでバーチャルな共同体が立ち上がり、それが国家や国民という意識をつくっていきます。日本という国や日本人の意識は、共通の言葉を使うことによって、新聞などの印刷メディアを通して、歴史的に作られていったのです。

## 和歌が物語を生み出す時

—語りと注釈の世界—

国文学国語学科 非常勤講師 金石哲



古典和歌の世界には本来、その和歌の成立とは何ら関係のない物語や説話が後付けで語られ、それに基づいて歌が解釈されるということがある。本講座は主に享受史的な観点から和歌をめぐるこれらの語りと注釈の世界の実態を明らかにしようとするものである。

そもそも、これらの後付けの和歌説話は題しらず・よみ人しらず歌に付会しやすい（『古今和歌集』一八・七六一（異伝歌）・八七八・九〇四・九九四・九九五など）。この時代の和歌の鑑賞は、題を詠む和歌でない限り、基本的には和歌成立の「場」の理解とワンセットで行われるが、その「場」が不明な伝承歌の場合、「場」をめぐる二次創作が比較的に自由であったのではないだろうか。

『伊勢物語』筒井筒の章段でよく知られる「風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」歌を一例にしてみよう。この歌は『古今和歌集』が初出であるが、題しらず・よみ人しらずの歌であり、本来は和歌成立の事情や作者が不明な伝承歌であったと考えられる。確かに、和歌のみを鑑賞すれば、夜に山越えを行う者を気づかうだけの内容である。ところが、『古今和歌集』には後付けの左注があり、この歌の成立の「場」を仮構する二人妻型の説話がみられる。当該の説話を要するに、新しい妻のところに通うようになった男が元の妻の素晴らしさに気づき、ふたたび戻って来るといった典型的な内容であり、上記二作品以外に『大和物語』にも同内容の話がみられる。前掲の和歌は、当該説話の中では元の妻がその恋敵である新しい妻のもとへ通う夫のことを気づかう歌として登場し、元の妻の内面の美しさを示す重要な役割を果たしている。

因みに、語りによる和歌享受の型が、主に「通い婚」の時代を生きる平安女性たちを中心に行われていたことは当該歌とそれに付会する二人妻型説話との関連性を考える上で非常に興味深い事実である。なぜならば、知識の伝達を目的として文字言語を用いる後世の注釈書などとは異なり、集団の情緒の共有を目的とする即興の語りは、通常、聴者にとって親しみやすく共感しやすい話題（ここでは「通い婚」）と親和性が高いからである。

ところで、大筋ではいずれの作品も二人妻型説話であるが、これらの三作品間には少なからぬ違いもみられる。たとえば、元の妻である「大和の女」の描写は、『古今

和歌集』左注では「琴弾く女」であり、『伊勢物語』では「化粧する女」、『大和物語』では「髪を梳る女」というように、変化している。このような変化は何故生まれるのだろうか。これも『古今和歌集』左注が「ある人、この歌は」で始まり、「となむいひつたへたる」で終わるように、この歌が享受される即興の語りの「場」を想定してみるとわかり易い。先述した通り、題読人不知の伝承歌に対して和歌成立の「場」を説明する大枠としての虚構が付会されたとしたら、このような異同は既知の虚構を語るそれぞれの話者が享受の「場」に応じて即興の言説（アドリブ）を加味するといった語りの特徴と無関係ではなからう。

もう一つ注目すべき点は、一般に、説話が人物名や地名などを離化する傾向にあるのに対し、和歌説話ではこれらが具体化する傾向にあるということである。『古今和歌集』左注では、「河内の国」「大和の国」とのみある地名が『伊勢物語』では「高安の郡」、『大和物語』では「葛城の郡」と地名が作品それぞれに異なる形で詳細になり、『古今和歌六帖』では作者名を「かぐやまのはなのこ」などとして入集している。このような付加的な解説も対面の聴者を意識しての注釈的な言説と関連づけて考えると説明がつく。

現存する歌物語や和歌説話の類話間の内容的な異同は、それがたとえ書かれたものであっても、和歌の情緒的共有という目的と、対面の場の即興的な語りという形式が結びついて生じるさまざまなバリエーションの一部なのではないだろうか。

一方で、注釈史に注目すると、『俊頼髓脳』は依然、和歌説話を多く載せ、それによって歌を解釈しようとする注釈態度をみせるが、『袖中抄』ではこれらの付会説話による解釈を不審とし、確かな文献に基づく「証歌」に重きを置いている。これは「語り」という音声言語を介して話者の口から聴者の耳へと伝わることをモデルとするそれまでの享受方式との決別を意味し、文字言語を介して読者の目へと伝わる、いわば知識情報の伝達を前提にした注釈のあり方なのである。

以上で見てきたように、和歌説話は語りと注釈の両方の特質を併せ持つ不思議で魅力的な世界を有するのである。

第 3 回

2018 年 6 月 30 日

## 詩の 100 年

—制度としての近代詩—

国文学国語学科 教授 浜田 秀



文学史は、作品を生み出す文学者によって作られてきた。しかし、文学者達が使用する言葉を支えているのは、日本語使用者の共同体であることを忘れてはならない。

ある共同体が使用する言語から、その文化へとアプローチする方法をとる学問として、言語人類学や認知人類学と呼ばれる学問がある。これらの学問は、例えば生物の名称から、その言語を使用する共同体への文化へとアプローチする。ここでは詩の「ジャンル名」を手がかりに、日本人の詩に対する常識がどのように変化したか、またそれに対して、辞書編纂者達がどう対処したかを取り上げていきたい。

詩のジャンル名という観点に立ったとき、重要なことが3点ある。一つは「詩」という語の語義が変化したことである。かつての「詩」は、いまでいうところの「漢詩」すなわち中国の古典詩形を指した。しかし、現在では通常口語自由詩型が想起されよう。また漢詩としての「詩」は和歌や俳諧など他のジャンルと対立する概念であったが、現在では「短詩系文学」として短歌や俳句を一括することが可能である。すなわち、新たに総称としての「詩」概念が出現したのである。

第二は、漢詩を指す言葉として、新たに「漢詩」という表現が生まれたことである。ランボーの詩や朔太郎の詩について述べるときに、ランボーの「洋詩」であるとか、朔太郎の「口語詩」という用語は現在必要としない。しかし、李白のそれは、「漢詩」と表現することがむしろ自然だろう。この「漢詩」という用語は、中国の古典語としては「漢代の詩」という意味でしか存在しなかったのである。これら用語の変化は当然辞典にも変化をもたらす。すなわち、第三の現象として、辞典類の「詩」の定義に変化がもたらされる。

以上の現象を分析する枠組みとしては、認知言語学のプロトタイプ理論とネットワーク理論が有効である。プロトタイプ理論によれば、「詩」の語義が漢詩から口語自由詩へと変化したことは、そのプロトタイプが遷移したと捉

えることができる。またネットワーク理論によれば、詩の総称が生じたことは、「漢詩」といった拡張事例が出現するにともない、従来の「中国古典詩スキーマ」が抽象化して、「定型スキーマ」が生じたと捉えることができる。

これらの動態的变化は、国立国会図書館の「デジタルコレクション」によって、その変遷を辿ることが可能である。1895年から1900年にかけて、「新体詩」「漢詩」の用例が飛躍的に増加する。それに引きずられるように単体の「詩」の内部では漢詩の事例が減少し、非漢詩の事例が増えていく。口語詩運動の出現語、1910年以降は、大勢を口語自由詩が占めるようになる。

プロトタイプには、「真正なもの」「純粋なもの」として価値に関与する傾向がある。「漢詩」という語彙に対して森鷗外や野口寧斎が反発を記しているが、これは中国古典詩が「詩」内部で「漢詩」と名付けられることが「詩」内部でプロトタイプの位置をはなれ、特殊なもの、周辺のなものとして位置づけられたことが関係している。

また、プロトタイプが変化する、つまりその対象が特殊なものではなく、当たり前のもに成ってしまうと、特殊化の為の用語は不要になる。「新体詩」「口語詩」といった用語は1905年～1909年をピークにジャンルの表示として使用されなくなる。それは「詩」という用語でこれらの文体を表示することが可能になり、「詩」に対する常識が変化した、つまり詩の特殊なものとして「新体詩」「口語詩」を位置づける必要がなくなったためであろう。

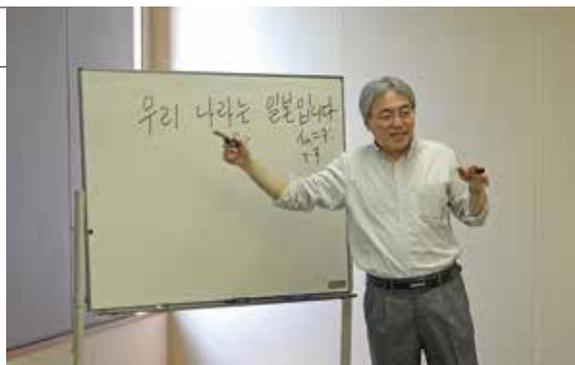
現在の文学史的常識は、決して自明な存在ではなく、このように近代になって「形成された」ものである。詩のジャンル名をたどることは、我々の常識を問い直すことでもあるのである。

第1回

2018年6月2日

## ハングルを学び、尹東柱「序詩」を読む

外国語学科 教授 熊木 勉



朝鮮半島で使われている言語は、多くの大学でそうであるように、学術的には朝鮮語というのが日本では通例になっています。しかし、朝鮮語という呼び方そのものにはこれまで少なからぬ葛藤がありました。よく知られるところでは、NHK 語学講座の名称問題がありました。朝鮮語講座と韓国語講座という表現の葛藤の中で、結局は「アンニョンハシムニカ? ハングル講座」という、かなり曖昧な名称になった経緯がありました（もちろん、ハングルは文字のことを指し、言語としてハングル語という表現は使われません）。1980年代前半のことです。いまや、大韓民国の発展は著しく、韓国の音楽やドラマを楽しむ方々も爆発的に増えています。少なからぬ大学で朝鮮語でなく、韓国語という名称を使うようになってきた状況も、そうした流れと無関係ではないのかもしれませんが。天理大学では、より中立的な意味を含めて、韓国・朝鮮語という呼び方をしています。

さて、韓国・朝鮮語を使う人口は、海外在住の話者までを含めると、おおむね8000万人との見方がされており、これは世界で15位程度と推測されています。日本語話者の数を考えてみても、相当の数であることは想像できるかと思えます。いつ、だれが、どのような目的で作った文字であるかというのがはっきりとしている世界でも珍しい文字がハングルであると言えます。ハングルは、朝鮮王朝4代王であった世宗によって、1443年に創製され、1446年に公布されました。私たちはこのハングルを日本の地下鉄や看板など、さまざまなところで目にすることができます。これらを少しずつでも読めるようになることはまさに視野の広がりにつながるものといえるでしょう。言語を知るといことは結局は「人間を知る」ということの道具にもなりえるはずです。

韓国・朝鮮語は、助詞があり、尊敬語があり、語順が日本語とほぼ同じであるなど、日本人にとってはとても学びやすい言語であるということが出来ます。もちろん、外国語ですからさまざまな違いがあり、発音も日本語話者には苦手な音もないわけではありません。しかし実際に口に出して発音してみると、その音そのものに、魅力を感じることもできるのではないかと思います。講座では皆さんと

詩人・尹東柱（ユンドンジュ：1917～1945）の「序詩」を原語で読んでみることにしました。それを通じて、韓国・朝鮮語の音を直接に感じ、詩の響きの世界を一端でも味わっていただければという意図によるものです。韓国・朝鮮語の発音の中でも日本語話者にはいささか難しい「リ」音に気をつけながら、繰り返し詩を発声してみました。そして、その詩の意味するところを話し合いました。そこにあるのは、1945年に20代の若さで福岡刑務所で命を落とさねばならなかった詩人の内面に広がる「恥なき生」を目指す姿勢や、「星」に象徴される、彼の心の中で大切にされた、故郷や、隣人たちの姿でもありました。

尹東柱は、朝鮮が植民地であった時代に、京城の延禧専門学校に学び、立教大学・同志社大学でも学びました。そして治安維持法により逮捕されることとなったのです。彼が大韓民国でも、朝鮮民主主義人民共和国でも、あるいは中国でも高く評価されるのは、何より厳しい時代の中で、自らのありように葛藤を続けながら、結局は純粋な詩を朝鮮語で書き続けたことにあります。さらには、彼の不幸な死は、まさにこの暗い時代を象徴するものとして私たちに訴えかけるものでもあり、彼の詩は、その彼が残した生きた声でもあります。「星をうたう心で / すべての死にくものを愛さなければ」と歌った彼の声は、戦争の厳しい時代の中でも自らを失うことのなかった詩人の声であるのみならず、現代の私たちの心にも響いてくるものがあります。日本では多くの方々が尹東柱を愛し、詩集も複数の翻訳があります。詩碑も同志社大学をはじめ、いくつかが建てられています。

しかし、こうした詩碑も大事ですが、私たちが忘れてはいけないのは、尹東柱や彼の詩を讃えることだけが重要なのではないということです。戦争では多くのアジアの方々が命を落とされました。尹東柱の詩の向こう側にそうした多くの方々の魂や声を聞き、時代の傷、私たち自身の過去を振り返ることが大切なのであると思うのです。詩を通じて、韓国・朝鮮語で発音してみると、そうした思いへの入り口の一つとさせていただければと願う次第です。

第 2 回

2018 年 6 月 9 日

## ウクライナ語の世界

言語教育研究センター准教授 日野 貴夫



皆さんはウクライナと聞いた時、どんなことをイメージされるだろうか。イメージすらあまり湧かないかもしれない。しかしウクライナは、ロシアを除けば日本の約 1.6 倍の広さを持つヨーロッパ最大の国で、少なくとも 4000 万人以上の人口を有する歴史的に見ればロシア発祥の地である。最近、そのロシアとの間でクリミア半島の領有を巡って紛争が勃発し、未だに収束を見せていないことはニュースなどでご存じの方もいらっしゃるだろう。また 1986 年に起こったチェルノブイリ原発事故の大惨事が、脳裏に刻み込まれている方もあるだろう。だがウクライナは、肥沃な黒土地帯として有名で、1970 年にマルチェロ・マストロヤニとソフィア・ローレンが主演した映画『ひまわり』のロケ地となった地平線に及び一面のひまわり畑、最近 SNS で話題になった「愛のトンネル」、またカルパチア山脈や黒海、ドニプロ川流域など風光明媚な場所がたくさんある魅力的な国である。

ウクライナ語は、ロシア語と同じく、インド・ヨーロッパ語族の中のスラヴ語派、東スラヴ諸語に属し、その起源は 9 世紀末のキーウ・ルーシ（キエフ大公国）時代まで遡る。この時期に、それまで各地に分住していた東スラヴ諸族は一体性を強め、ウクライナのキーウを中心とする統一国家が誕生した。キーウ大公ヴォロディーミル（在位 980 - 1015）は、988 年にキリスト教のなかの正教を国教とし、スラヴ典礼の用語として古代教会スラヴ語をキリル文字とともに受け入れた。両言語の文章語の祖と言える古代教会スラヴ語は、その後長きにわたって公式のあるいは教会の言語として使用されることになる。また教会スラヴ語が契機となって言語の統一と標準化が進み、一般に古期ロシア語といわれる言語で書かれた文献資料が 14 世紀までの間に各地に残された。

しかし、キーウを中心とする言語的統一は 12 世紀後半から内紛の激化により著しく弱まり、地域差が目立つようになる。さらに、13 世紀前半のモンゴル・タタール軍の南ロシア征服により、分裂が決定的となった。15 世紀後半からモスクワを中心とするロシア再統一が進行し、国家の拠点もモスクワに移行する過程で、モスクワのいわゆる「大ロシア語」が優位を確立するようになる。これにともない、大ロシアの南に位置するキーウを中心

に使われるウクライナ語は、「小ロシア語」と呼ばれるようになり、帝政ロシアにおいては、地方語として差別・圧迫され公式の使用を禁じられるまでになった。ウクライナ語が民族語としての地位を確立するのは、1917 年のロシア革命以後であり、完全に国語となるためには、1991 年のウクライナ独立を待たねばならなかった。

このようにウクライナ語は、国政にも翻弄されながらいわば窃かに発展を続けてきた。大雑把に言えば、文語にウエイトを置いたロシア語に対し、ウクライナ語は口語にウエイトを置く形で発展してきたと言える。ただ、どちらの言語も現代標準語の規範の確立に大きく貢献したのが、19 世紀に活躍した詩人であったということは興味深い。ロシアではプーシキン（1799 - 1837）、そしてウクライ語はシェウチェンコ（1814 - 61）がその役割を演じた。彼らの功績を引き継ぎ、ロシア語は主にドイツ語やフランス語からの借用語を多く受け入れ、ウクライナ語はポーランド語の影響を受けながら、言語の独自性を保ちつつ、今日に至るまで進化を遂げている。

現代ウクライナ語は、ロシア語と同じくキリル文字を使用し、ロシア語とは異なるものもあるが、33 個のアルファベットを使用する。ウクライナ語の話者は、およそ 4500 万人。話される地域は、ウクライナ本国やその周辺諸国がほとんどだが、アメリカ合衆国やカナダなどにも多くウクライナ語を話す人がいる。標準語は、ドニプロ中央方言にもとづき成立しているが、西部方言はポーランド語の影響が大きい。ウクライナ本国においては、一般に西部地域ではウクライナ語を話す人が多く、東部および南部ではロシア語を話す割合が高い。

少し古い話になるが、2001 年に行われた最後の国勢調査によると、ウクライナの人口は 4850 万人で、ウクライナ人が 77.8%、ロシア人が 17.3%であり、ウクライナ語を母語だと答えた人は 67.5%、ロシア語と答えた人は 29.6%だった。前回の調査に比べるとウクライナ語化が進んでおり、今後この傾向はますます顕著になっていくと思われる。ただし、これはあくまでも傾向であり、多くのウクライナ国民は、ウクライナ語もロシア語も理解し、状況に応じてそれらを使い分けることが多い。ウクライナ語とロシア語が混在している場合も多く非常に複雑である。今後の言語情勢に注目していきたい。

第3回

2018年6月16日

## 音の響きを楽しむ

—音を使ったことば遊びについて—

外国語学科 講師 山本 晃司

本講座は「音」に関する4つのトピックから構成されています。1つ目のトピックは『日本語と英語のことば遊び』です。「いし」と聞いて連想される日本語はいくつかあります。例えば、「石」「意思」「医師」「遺子」などです。このように音は同じでも意味が全く異なることを同音異義語といいます。最近、この技法をうまく使ったテレビCMがありました。武田信玄と上杉謙信が登場し、ことばを交わすのですが、次のような一文がでてきます：

「武田信玄、進言する」「上杉謙信、検診する」

「しんげん」「けんしん」を基にした同音異義語です。このような表現は英語にもあります。ホテルの受付で交わされる会話です：

- Can I help you, sir? (いらっしゃいませ、お客様)
- We'd like a room for two nights please. (二晩泊りたいのですが)

一見するとごく普通の会話ですが、画面上では鎧を着た二人の騎士がこれから宿泊しようとしています。つまり、「two knights」（二人の騎士）と「two nights」（二晩）を掛け合わせているのです。これはいずれも同じ発音であるからこそできる遊びです。

2つ目のトピックは『つづりと音が合わないからこそ!?』です。映画の1シーンに次のようなものがあります：

“Nice to meat you!” (初めまして)

“On your meat. Get set. Go!” (位置について、用意、ドン!)

“Shanks for the memories” (思い出をありがとう)

本来、“meet”（会う）とあるべきところが“meat”（肉）、



“mark”（しるし）が“meat”、“Thanks”（ありがとう）が“Shanks”（足のすね）となっています。このいずれの表現も、全く同じ発音、または一部分が同じ音となっています。では、なぜ肉に関する語が使われているのかというと、これらの表現が見られる場所が精肉業界による会合のシーンとなっているためです。

3つ目のトピックは『音の並びにご注目』です。語の頭、または端に同じ・類似した音を持つてくる技法を頭韻、脚韻といいます。これらの技法はイディオムやことわざに多く見られます。例えば、“busy as a bee”は“b”が各語の頭に置かれ、“y”と“ee”という音が語の端に置かれています。“Care killed a cat.”も同じく各語の頭に“k”という音がきています。このような韻を使った表現は21世紀にはいっても使われており、広告、新聞の見出し、ドラマの台詞、掲示板などに見られます。また、これらの技法は大昔の英語（古英語）からも使われていることから伝統的な技法と言えるでしょう。

最後のトピックは『音には意味がある!?』です。音には意味がないと言われていますが、例外も多くあるようです。例えば、オノマトペです。ニワトリの鳴き声を世界各国から集めてみると“k”という音が共通してみられます。また、水が「ぼたぼた落ちる」と「ばたばた落ちる」では、後者の表現でより多くの水が流れている印象を受ける人が多いようです。さらに、アメリカの有名歌手 Lady Gaga さんが“Kaka”や“Tata”にしなかったことにも何らかの言語学的な理由があるようです。一説によると、のどの振動を伴う有声子音は「大きさ」と結びつく傾向があるといわれています。

本講座では「音」に焦点をあてた不思議な一面を紹介しました。文法も大切ですが、時にはその語の意味がわからなくても、その語で使われる音に耳を傾けてみるのはいかがでしょうか。

第 4 回

2018 年 6 月 23 日

## 中国語の発音と漢字

言語教育研究センター 講師 阿部 慎太郎



### 1. はじめに

日本政府観光局 (JNTO) によると、訪日外国人の数は、2008 年は約 835 万人であったが、2017 年には約 2,870 万人と 3 倍以上の数になっている。注目すべきは、国別、地域別の割合である。上位を見ると、中国語圏の国、地域は中国 (1 位)、台湾 (3 位)、香港 (4 位) を合わせると約 1400 万人以上に及ぶ。

### 2. 中国語の発音：「声調」について

中国語 (「普通話」を指す) は、声調のある言語 (声調言語) と言われている。声調とは、音の高低、トーンを指す。声調の数は言語によって異なり、中国語では主に四種類あることから「四声」とも呼ばれる。例えば、次の 4 つの単語は、同じ「ma (マー)」という発音であるが、声調の違いによって意味を区別する。

“妈 (お母さん)” : 高く平らに読む (第一声)

“麻 (麻)” : 一気に上げて読む (第二声)

“马 (馬)” : 低く低く抑えて読む (第三声)

“骂 (ののしる)” : 一気に急降下して読む (第四声)

日本語母語話者にとって難しい声調、実は「関西弁」には中国語の四声に似た特徴がある、と日下恒夫氏 (元関西大学教授) は指摘する。例えば、関西弁では「血が出る」は「ちー出てる」、「火がついてる」は「ひーいてる」と言う。この「ちー」と「ひー」、どちらも一音節の単語であるが、少し長く発音し、「ちー」は高く平らに、「ひー」は一気に高く上げて発音し、音の高低の違いをつけている。また、これ以外にも、「あそこに木があるやろ」と後ろに「～がある」が付くと「木」を低く読み、「歯が痛い」は「はー痛い」のように高い音から一気に急降下する。

この「ちー」「ひー」「きー」「はー」は、順に中国語の第 1 声～第 4 声に似ている。このように、関西弁には一音節の単語に対して、主に 4 種類の音の高低をつけて話している。関西弁を話す人は、中国語の声調を習得しやすい (?) かもしれない。

### 3. 日中漢字の字形

次に、漢字の字形について考えてみたい。現在、中国

語では 2 種類の漢字が使われている。一つは、主に中国大陸で用いられている「簡体字」と、もう一つは主に台湾で用いられている「繁体字」である。

中国では中華人民共和国成立後、大きな文字改革が行われた。文字改革の目的の一つは、文字の簡略化である。1956 年に『漢字簡化方案』が制定され、例えば、「學」や「樂」のように、画数の多い漢字を“学”、“乐”のように簡略化した。ちなみに、中国では『漢字簡化方案』以前の漢字を「繁体字」、それ以降を「簡体字」と呼ぶ。

ここで、中国語を例に、簡略化の特徴を整理しておきたい。

- 一部を簡略化したもの：「語 → 语」「學 → 学」
- 全体を簡略化したもの：「爲 → 为」「樂 → 乐」
- 一部を同音の (画数の少ない) 漢字に置き換えたもの：「億 → 亿」
- 新しく文字を作り変えたもの：「筆 → 笔」  
など

一方、日本でも、『当用漢字表』(1946 年) において、字種の制限や文字の簡略化が行われた。日本では、これ以前を「旧字体」、以後を「新字体」と呼ばれることがある。

中国語、日本語ともに、簡略化の際、全ての漢字に対して一から字の形を考えることは困難であるため、その多くはこれまで実際に書物に書かれた崩し字や俗字などを参考に作られた。このことは通常は書道用に使われることの多い書体字典を見るとよくわかる。例えば、「樂」という字は、日本の新字体では「楽」、中国の簡体字では“乐”と簡略化されたが、書体字典には、「楽」と“乐”のベースとなったと思われる字が見られる。本講義では、この書体字典を見ながらいくつかの漢字に対して参加者と検討した。

今後、街で中国語を見かけたら、この簡体字は日本のどの漢字と同じか、この簡体字はどのように簡略化されたかなど、クイズ感覚で眺めてみると、また新たな一面が見えるかもしれない。

日本政府観光局 (JNTO) 「日本の観光統計データ」

<https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--comparison>

第1回

2018年9月22日

## 郡山の幕末維新と藩主柳澤保申

公益財団法人 郡山城史跡・  
柳沢文庫保存会 副理事長

柳澤 保徳



### 1. 幕末期

郡山藩最後の藩主柳澤保申は、弘化3年（1846）、保興の四男として郡山に生まれ、嘉永元年（1848）、父保興が三四歳の若さで急逝したため、わずか三歳で家督を継いだ。近世中後期の郡山藩は自藩領の統治のみならず、京・大阪・奈良の地に異変があれば馳せ参ぜねばならず、幼い藩主の誕生には様々な困難があったであろう。嘉永から文久にかけての時代、江戸では嘉永6年（1853）6月にペリーが来航。急遽、江戸湾警衛が必要となり、郡山藩は、翌年、藩士安元杜預蔵らを江戸に派遣する（杜預蔵は吉田松陰とも交流があったが、同年江戸で病に倒れた）。文久元年（1861）5月下旬には、東禅寺事件として知られる英国公使館襲撃事件が発生。公使館があった高輪・東禅寺に尊王攘夷派の浪士らが夜襲をかけ、オールコック公使の暗殺を企てたが、警護にあたった幕臣と西尾・郡山両藩士らの奮戦により阻止された事件である。後日、英国政府は、警護に功績のあった者らに金牌・銀牌を贈っている。

同じ頃、京・大阪では、安政元年（1854）9月、ロシア船ディアナ号のプチャーチン一行が大坂湾に侵入・停泊したため、京・大阪は大騒動となる。郡山藩からは伏見街道警衛のため1000人が出動している。一方、大和では、文久3年（1862）の「八月十八日の政変」に際し、「天誅組の変」が勃発。五条代官所を襲撃した天誅組に対して、紀州（徳川）・津（藤堂）・彦根（井伊）、郡山（柳澤）の四藩に追討の命が下り、郡山藩も吉野に出陣した。元治元年（1864）7月の「禁門の変」では、郡山藩は山崎界隈を警衛。慶応3年（1867）10月の「大政奉還」直後、在府中の保申は上京の命を受け、急ぎ江戸より京に入るが、11月下旬には京を退き、帰藩。「王政復古」の大号令を郡山で聞くことになる。

### 2. 維新时期

慶応4年（1868）正月3日、鳥羽伏見の戦いが始まり、慶喜公の江戸帰還を機に郡山藩は「王事に勤める」との態度を鮮明にした。「柳澤保申家記」によれば、1月9日

に公家東久世通禧の警衛を命じられている。その後、5月には郡山藩士約150名余が駿府（静岡）から江戸へ、そして7月には東北戦争に輜重（後方支援）部隊として従軍している。

維新後の藩組織は新政府の「藩治職制」に従うこととなった。明治2年（1869）6月の版籍奉還後、藩知事保申のもとで藩政改革が本格化。門閥にとられない人材登用が行われ、藩士の新田、安元、平岡らが改革の責任者として活躍する。しかし、藩財政の困難さから改革は順調には進まなかったようで、翌年一月、保申は自ら「藩政改革実施二付柳澤保申演達書」なる所信を示し、藩士一同に協力を求めている。

藩校の改革（近代化）も大きな課題であった。文武両道の総稽古所を敬明館と改め、さらに、明治3年（1870）には洋学を取り入れ、初等・中等教育を指向した造士館を開校する（廃藩置県後に廃校）。

明治4年（1871）7月、廃藩置県により全国の「藩」が廃止され「県」が誕生した。藩知事（旧藩主）には東京貫属が命じられたが、保申は郡山を去る直前に旧藩士らに「廃藩置県実施二付柳澤保申告諭書」を示し最後のメッセージを残している。

郡山藩は郡山県となるがその直後の11月には奈良県に編入となった。翌年1月には、兵役を失った士族ら約7百名の「抗議」集会在城門（鉄門）前で行われた。県令らが説得に駆けつけ、旧藩庁関係者からは「救助嘆願」が提出されたという。旧藩士族は受難の時代を迎えることになった。

その後、士族は明治6年から9年にかけて家禄奉還とともに金禄公債証書の交付を受け、各家の生計を立てることになるが、利息のみでの生活維持は困難であった。そのため、郡山在住の士族は、「結社」を組織し共同して事業に取り組むことになった。機織り業（段通生産）を興した錦鱗社（明治12年頃設立）もその一つである。ほぼ同時期に、保申の主唱した第六十八国立銀行が設立され、士族就産事業が本格的に展開されることになる。

第 2 回

2018 年 9 月 29 日

## 大和郡山のじゃんじゃん火

— 怪火伝承の地域性 —

歴史文化学科 教授 齊藤 純

「じゃんじゃん火」は、奈良県に特徴的な怪火の伝承である。この世に恨みを残して死んだ死者の魂が、火の玉になって飛びといい、「じゃんじゃん」と音を立てることからその名がある。昭和 8（1933）年の『大和の伝説』の紹介で広く知られるようになり、有名なのは、天理市・桜井市境界の龍王山に城を築いた十市遠忠といちとあただにまつわる伝承である。この遠忠は、信貴山城の松永弾正と戦って敗れ、魂がじゃんじゃん火になったと伝える。

実は、じゃんじゃん火が、民俗学の研究者に知られたのは『大和の伝説』よりも早く、昭和 3（1928）年 7 月の雑誌『民俗芸術』第 1 巻第 7 号の特集「諸国盆踊号」に寄せられた報告が最初だった。これは大和郡山の藩士にまつわる悲恋話である。大和郡山城主、豊田秀長の家老の倅、亀井式部が、百姓娘の美雪と恋に落ち、打合橋で逢引を重ねた。それが武家の法度にふれ、6月7日夜、橋で斬首され、橋の下に飛んだ首を抱いて美雪も自害した。以来、毎年6月7日夜、2つの人玉が東西から打合橋に飛来し、ジャンジャン音を立ててもつれあう。その慰霊のため、毎年6月7日夜、橋のたもとで「ジャンジャン火迎へ」の踊りを踊るといふ。打合橋は郡境で、町と村の境にあたる。橋は毎年「佐保川の大仏堂」で賑わい、6月7日は螢の盛んな頃だった。ただし、昭和 28（1953）年の『大和郡山町史』の「年中行事一覧」に踊りの記載はなく、佐保川名物の螢にちなみ、螢を靈魂と考える一般的な俗信にもとづいて創造された、一時的な観光用の伝承だったのではないかと推察される。

大和郡山と関わる話では、こんな話も伝わる。昭和 10（1935）年、雑誌『旅と伝説』第 8 年 5 月号の「大阪民俗談話会記録」に掲載されたものだが、奈良市の大安寺に出るじゃんじゃん火は、田植中の兄が投げた苗が「生田伝八郎」という男にあたり、男は兄を殺害したが、その仇を弟が討ち、兄弟の魂が火の玉になったものといふ。生田伝八郎は、「敵討そうぜんじ崇禅寺馬場」で知られる人物で、



郡山藩士で本田忠直の家来。同じ家中の遠城兄弟から末弟の敵として狙われるが返り討ちにし、その後、自殺する。これが評判になり、芝居や映画にもなった。ということで、田植え兄弟の仇討ちに関わる人物ではない。つまり、この伝承は、評判になった敵討ち事件の外伝のように語られた伝承と考えるとよいだろう。

同じ「大阪民俗談話会記録」は、佐保川の「高橋堤」に住む「非人」兄弟の仇討ち話も掲載する。兄弟の仇は郡山藩に仕えていたが、兄は足が悪く、弟の留守中に訪れた仇に殺害される。が、弟が仇をおびき出し本懐を遂げ、その兄弟の魂が火の玉になったという。この話は、郡山藩にかかわる芝居「敵討かたきうちつれのにしき檻樓錦」の「大宴寺堤」によく似ており、やはり芝居の敵討ちの設定を借用して語られた伝承と考えられる。

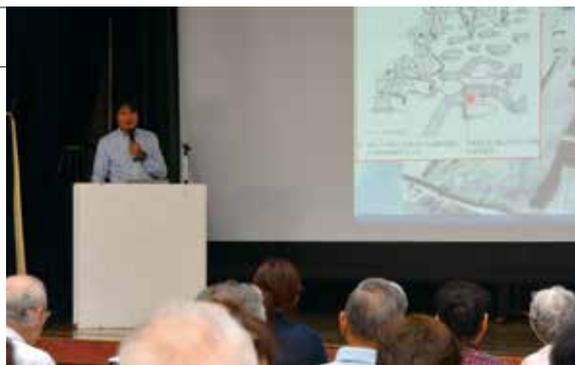
こうしたじゃんじゃん火伝承は、奈良県内の盆地地域で 20 例が報告されている。その内容を分類すると、A：十市氏の戦死（8 例）、B：男女の悲恋・心中（5 例）、C：兄弟の敵討（2 例）の類型が設定できる（1 例や不明のものを除く）。A は天理や桜井など中世の十市氏の勢力範囲の村落に分布し、B・C は奈良や郡山など近世の町場に分布する。じゃんじゃん火は、火の玉を怨霊の発現と考える伝統的な怪火の観念にもとづく伝承だが、各話の具体的な表現からは、地域の歴史記憶や社会環境が読み取れる。つまり、A は、村の史蹟や記憶で構成される歴史意識が反映した村の伝承であり、B・C は、芝居・実録・噂など町の住民の新しい関心事の反映した町の伝承といふことができるのである。

第3回

2018年10月6日

## 西京の土器造りと赤膚焼

大和郡山市教育委員会 山川 均



### ① 西京の土器造り

平城京の西側（右京）を指して「西京」と称するが、この地域では古くから土器造りが盛んで、特に中世から江戸初期（12世紀ころから17世紀はじめまで）が最盛期であった。西京で生産された土器のうち、「奈良火鉢」と呼ばれる平面形が花形を呈する独特の火鉢は、全国的に流通した。

こうした奈良火鉢などの土器を焼成した窯は今までのところ見つかっていないが、西京周辺では「粘土採掘坑」と呼ばれる土取り穴が多数見つかる。この粘土採掘坑が、「西京の土器造り」に関わる唯一の遺構である。

### ② 雲華焼焼成窯の発見

2017年10月、郡山城下町のメインストリート・柳町通に面する場所で、「雲華焼」の焼成窯とみられる遺構が見つかった。雲華焼とは、土器の茶色の地肌に所々黒雲のような黒色の斑紋が散らばる厚手の土器（主に茶道具）で、伝世品も少なく、発掘調査でもほとんど出土事例がない希少な焼物である。これまでその生産に関しては謎に包まれていたのだが、この発見により、雲華焼は郡山城下町の内部で焼成されていたことがわかった。

この場所で雲華焼の焼成が始まったのは江戸前期（17世紀前葉）のことで、江戸中期（18世紀後葉）まで続いていた。窯の前に設けられた溝から、雲華焼の焼き損じや、窯の中で棚を作っていた部材（窯道具）などが多量に出土したものの、今回発見されたのは窯の基底部で、その形状から単室の素焼窯とみられ、その生産規模は比較的小さかったものと思われる。

いずれにせよ、ちょうど西京の土器造りが終焉した時期に、郡山城下町の内部で雲華焼の生産が始まったこととなる。土器職人が城下町に呼び寄せられ、ここで高級な雲華焼の焼造に従事した様子が浮かび上がる。

### ③ 赤膚焼のはじまり

「大和の雅陶」とも呼ばれる赤膚焼の起源については、これまで戦国末期に郡山城主の豊臣秀長が常滑より工人「与九郎」を呼び寄せたのが始まりという説、江戸前期に作庭家・茶人として名を成した小堀遠州が始めたという説、そして京焼色絵の祖・野々村仁清が始めたとする説の3説が唱えられていた。一方、近年の発掘調査で出土する赤膚焼は、相伴する遺物からみても幕末～明治のものに限られており、江戸前期はおろか、同中期まで遡る例は見られない。

こうした状況の中、比較的近年発見された「赤膚焼由来書」という史料では、郡山藩主・柳澤保光（堯山公）の肝いりで藩御用商人の住吉屋平蔵が郊外の五条山に登り窯（現存）を築いたのが赤膚焼のはじまりとしている。そしてそれは、寛政年間（1789～1801）のことであったという。この史料が正確だとすると、赤膚焼の本格的な焼造開始時期は、雲華焼の終焉直後ということになる。その背景にはおそらく、城下町内部での公害（煙・火）の問題と、より商業性の高い陶器生産への志向があったのではないだろうか。

### ④ まとめ

中世からの伝統を有する西京の土器造りは、近世郡山藩の成立と共に城下町内部に移り、雲華焼の焼造が始まる。しかし江戸時代後半となると公害問題が表面化し、また土器より商業性の高い陶器生産が注目されたことにより、郊外の五条山で赤膚焼の本格的な焼造が開始された。

第 4 回

2018 年 10 月 13 日

## 郡山藩と文久修陵

公益財団法人 郡山城史跡・  
柳沢文庫保存会研究員、  
天理大学非常勤講師  
吉田 栄治郎



文久2年（1862）閏8月8日、下野国宇都宮藩主戸田忠恕から「山陵修補の建白書」が幕府に提出され、8月14日に幕府の許可を受けた。わずか7万7000石の小藩である宇都宮藩がこうした壮大な計画を打ち出したのは、幕府からその年一月に起こった「坂下門外の変」に藩士がかかわったとの疑いをもたれたことへの一種の弁明であった。

一方、幕府は万延元年（1860）3月の「桜田門外の変」のち公武合体路線に転じ、仁孝天皇皇女和宮を14代将軍家茂正室に迎えるなど朝廷との融和を図っていたため、渡りに舟とばかりに建白を受け入れ、宇都宮藩に修陵を命じた。

幕末に流行した復古運動の象徴ともいえる修陵事業は文久3年（1863）から慶応元年（1865）までの3年間続けられ、最大推計20万両以上とされる経費は幕府・宇都宮藩や献金でまかなわれたが、治定地の村々は労働力の提供や役人接待の負担に苦しんだ。

郡山藩領内では元禄10年（1687）の修陵の際添下郡に6陵、葛下郡に2陵が治定されていたが、葛下郡2陵は未定、垂仁・成務・安康・称徳・平城天皇と神功皇后の添下郡6陵は現地踏査を経て文久2年末ごろ治定地が決定された。それにより、垂仁天皇陵は齋音寺村宝来山、成務天皇陵は超昇寺村字石塚、神功皇后陵は山陵村字五社神、安康天皇陵は宝来村字保天堂、称徳天皇陵は超昇寺村字高塚、平城天皇陵は常福寺村字ねじ山にそれぞれ治定されたが、いずれも現在の天皇陵である。

6陵のうち平城・称徳・安康の各天皇陵および神功皇后陵が元禄10年の修陵の治定地を動かされたが、それはそれは次の理由による。

平城天皇陵は『延喜式』では添上郡に属するが、元禄修陵ではなぜか添下郡常福寺村字ヒシヤゲに治定されていた。蒲生君平は在位の時期から墳形があわないとそれ

を否定して常福寺村字ネジ山とし、文久修陵では蒲生案が受け入れられ、常福寺村は添下郡なので『延喜式』からははずれるが、この付近の郡境はあいまいだと強弁して字ネジ山に決められた。

神功皇后陵は『延喜式』には超昇寺村御陵山に治定され、それ以来変化はなかったが、西大寺所蔵の「京北班田図」にかつてあった盾列池を挟んで成務天皇陵が南、神功皇后陵が北に描かれていることを根拠に、元禄修陵時に称徳天皇陵に治定された山陵村字五社神を神功皇后陵に治定替えした。

これにより称徳天皇陵の場所がなくなり、称徳天皇の西大寺との由縁から西大寺付近で探索されたが見つからず、成務天皇陵に南接する超昇寺村字高塚に治定された。

安康天皇陵は元禄修陵では宝来村字兵庫山に治定されたが、蒲生君平が宝来村にある保天堂を安康天皇の名前の穴穂から穴を除いた「穂天皇」が転じたものとし、以来保天堂が安康天皇陵となり、文久修陵でもその説が採用された。

文久修陵が佳境に入ったころ、文久3年8月17日に「天誅組の乱」が起こり、大和国南部は騒然となり、郡山藩も京都守護職松平容保の命で追討の兵を出したが、人夫役が課せられるなど領内村々の負担はさらに重くなり、開国以降の物価騰貴もあいまって社会不安が増大した。

第5回

2018年10月20日

## ライヴァル 郡山の好敵手たち

歴史文化学科 講師 黒岩 康博

近代日本の地方自治体制は、明治22年(1889)の市制施行、翌23年の府県制・郡制公布を契機に大きく整備されることになるが、それはまた都市間競争の時代の幕開けでもあった。同31年、奈良県内で唯一の市である奈良市が成立したが、同市には県庁所在地であるという以外の拠点性はなく、水道事業の開始も大正11年(1922)と遅かった。その奈良市のさらに後塵を拝したのが、旧城下町でありながら戦前は市制未施行地であった郡山である。制度的には都市未満であった郡山だが、国からの拠点性の付与をまず、奈良・和歌山・弥富といった街と、教育・スポーツ・産業の面で競争を繰り広げつつ、アイデンティティを形成していく。

明治期前半、旧制中学校の設置問題で競争相手となったのは、奈良(奈良町・奈良市)であった。郡山には、明治9年に創設された郡山予備校が郡山中学校と改称されて以来、一貫して旧制中学校が置かれてきたが、同26年吉野尋常中学校と合併されるに際し、その新たな開設場所として、「古代文化の香り高い数々の遺跡の存する本町こそ、生徒の志気を深めるにふさわしい所」と謳う奈良町が、強力な誘致活動を行ったのである。あわや双方の住民数百名同士が県庁そばで衝突、という事態にまでヒートアップしたこの問題は、最終的に旧藩主柳沢氏からの土地・資金の提供が大きな決め手となり、郡山町への奈良県尋常中学校(県内唯一の旧制中学校)設置という結果に落ち着いた。これにより、郡山は県内中等教育の拠点となり、大正13年に奈良中学校が開校するまで、旧制中学校は郡山・畝傍・五條といった中和地域に偏在することとなった(高等女学校も同様)。

中等教育の拠点となった郡山の町には、広く学校文化も根付いていくこととなる。その最たるものが野球であった。郡山中学校に野球が伝わったのは、明治28年頃のこととされるが、当初は同じく野球部を持つ奈良県師範学校と覇を競っていた。そうした野球熱に拍車をかけることとなったのが、大正4年8月に始まった全国中等学校優



勝野球大会(現在の全国高等学校野球選手権大会)である。奈良県勢の参加は同6年からであるが、当時は県予選の後に紀和大会を勝ち抜く必要があったため、和歌山県勢、殊に和歌山中学が厚い壁として立ち塞がった。郡山中学は大正7・10～12年、昭和6・7年(1931・32)と紀和大会決勝まで進出しているが、そこでほぼ全て和歌山中学に敗れている(昭和6年は和歌山商業)。広島商業で監督を務めた石本秀一の指導を受けるなどして、郡山中学が奈良県勢として初めて紀和大会を制したのは、昭和8年のことであった。戦後の同53年、全国で1県1代表制が施行されてからは、県内高校野球は郡山・天理・智弁学園の3強体制となるが、それまで県内野球の中心となったのは一そして和歌山と対峙したのは一、郡山中学、延いては郡山の町であった。

享保9年(1724)の柳沢吉里入部に伴って始まったとされる特産物の金魚養殖も、文久年間(1861～64)に郡山の行商人から買い取って飼育を開始した愛知県弥富が、明治中頃に稲田3町歩を全て養殖池に変えて本腰を入れ始めると、強力なライヴァルへと成長した。同地は東京・横浜と並んで欧米への輸出を早くから手がけ、昭和初期には和金・琉金といった大衆の品種を大量に生産・輸出し、全国2位の生産地となっていく。太平洋戦争下の食糧増産策に伴う養殖中断と伊勢湾台風により、大きな打撃を受けた弥富の金魚養殖は、その後郡山と匹敵するところまで生産数・生産額を回復させることはなかったが、養殖品種の多さと高級路線への転換などにより、現在も「日本一の金魚の産地」という看板を掲げ続けている。

郡山の町は、近代以降、少なくとも上記の3つのライヴァルとの対抗関係にさらされた。古代よりの歴史を誇る自治体が多い奈良県内において、都市間競争により醸成された近代以降の都市風土をアイデンティティとするこの土地が持つ意義は、非常に大きい。郡山は、奈良県の近代史研究が持つ重要性を体現した場所なのである。

2018 年 7 月 31 日

## 不登校支援の基本とポイント

—不登校をこじらせない取組について—

人間関係学科 教授 千原 雅代



この講座では、小中学生の不登校を中心に、基本的な理解の視点を提供し、学校現場で見られがちな不登校をこじらせてしまうポイント、その防止について話させて頂いた。

不登校は、本人の甘えから生じる現象ではなく、多くは思春期心性を背景とする子どもの自我確立の営みであり、子ども一人の問題ではなく、多様な家族関係、学校環境、社会の在り方のなかで生じている。そのため、不登校支援の目標は子どもが元気になることと考えるのが適切であり、そのほうが子どものこころの仕事が進展する。それは時には家族の再編や教師の他者理解の再編を迫る事態になりうる。

その過程は、大和郡山市不登校支援ガイドブックに掲載されている子どもたちの心のエネルギーの回復過程に図示されている通りである。シグナルが出る時期、初期、さなぎ期前期、さなぎ期中期、回復期、再登校期にわけて考えられる。シグナル期は月に3日程度の欠席が始まる状態であり、初期は登校ができなくなった状態だが、不登校をこじらせないためには、特にこの初期対応が重要である。本人および保護者をそっくりそのまま受け入れること、適切なアセスメントにもとづき、パニックに陥る保護者を支え、「ともかく一緒に考えていきましょう」という姿勢で支援することが不可欠である。この時期に登校するための取組を行い、子どもが仮に登校したとしても本質的な葛藤が解決されていない場合は、進学したのち再び不登校になる可能性がある。

次に本格的に不登校になったさなぎ期前期は、保護者も教師も先が見えず悩みが深くなる。初期からさなぎ期にかけては、子どもが大事にしていることに教師も関心を持ち、それを通して関わるのが子どもとつながる一つの方法になりうるが、先が見えないなかで、SC 等と連携しつつ見立てを共有しながら、悩みぬくことに意義があると考えられる。

この時期、学校の話は出しても本人にはプレッシャーであることが多く、かえって抵抗を招くことが多い。しかし、この時期には保護者側が子どもの真の苦しみに気づき、生き方の節目になるような「底を打つ体験」が生じることが多い。そののち、保護者との関係性が変化し、子ども返りなどが生じて、子どもの心にはエネルギーが少しずつたまり始めることが多く、それに応じて、少しずつ自立を促すような取組が功を奏する。

なお、虐待など児童福祉的な対応や家庭が崩壊しており、子どもの養育が困難であるような事例においては、保護者との関係性の変化よりも、子どもが教師やSC,SSWら、多様な大人あるいは同胞集団といった多様な社会集団のなか自我形成をしていくことも多い。神経症圏ではなく精神病圏の不安を抱えた子どもには、安心安全な二者関係を提供しつつも、関わる者の生き方として実現されている倫理規範をもって壁となりつつ、出会っていく必要性について考察した。また、かなり重篤な事例であっても保護者への共感的理解をベースとしたケースワークを実施し、生活や相談の体制を整えつつ心理療法を実践することが有益であることも多く、虐待防止や養育の在り方の変化を生み出していくことができる事例も少なくない。いずれの時期においても重要なのは、専門職を含めた支援する者の共感的理解の能力である。講座では、共感的理解のある対応とそうでない対応を対比させ問題提起させていただいた。

さなぎ期後期に入り、少し子どもが元気になったところは肝心であり、少しずつ甘えを心の中にしまってもらう取組と同時に、アセスメントに基づいた「適量」の登校刺激がよいと思われる。不登校支援には正解はないため、月並みではあるが、自ら実践し、自分の関りかたの癖などを意識化しながら、子どもや保護者と関係を切らず対話し続けることが多様な不登校という状態を抜けて子どもが自分をつかんでいくという仕事を支えると考えられる。

2018年5月12日

## ウエルネスウォーキング

—お散歩でこの国を元気にする—

体育学部 講師 蓬田 高正

5月12日(土)に公開講座「ウエルネスウォーキング—お散歩でこの国を元気にする—」を、晴天の下、9名の参加で天理市柳本町にある天理市トレイルセンター周辺にて開催しました。



ウエルネスウォーキングとは、ウエルネス理論に基づいたプログラムで、ノルディックウォーキングや健康ウォーキング、まち歩きなどの要素を取り入れた新しいウォーキングスタイルです。ドイツの健康保養地で行われている「自然療法」を活用し、心拍のコントロールをしながら健康的に楽しく歩きます。

そして、そこに住んでいる人々との暮らしびりと地域の自然や歴史を直接体験することで、地域住民が元気になり、地域住民の健康寿命を伸ばすことをねらいとしています。

当日は出発地点の柳本公民館にて、ウエルネスウォーキングについての説明、また協力団体である日本ウエルネスウォーキングの西村典芳会長（神戸山手大学教授）からウエルネスウォーキングに関する先進的な取組について説明がありました。

日本ウエルネスウォーキングの西村典芳会長（神戸山手大学教授）による説明



ウエルネスウォーキングに関する説明

その後、約3.8km、高低差約120mのウォーキングコースを、途中心拍数を測りながら歩きました。心拍数は健康増進に効果的とされている（160-年齢）を目安に、一定のペースを保ちながら歩きます。



途中心拍数を測りながら歩きます。



大和平野を望む場所での休憩

ゴール地点の天理市トレイルセンターでは、水療法の一種である「腕浴」を体験しました。これは水を貯めた水槽に腕を浸し、温・冷によって血液循環や新陳代謝の促進の効果をねらったものです。



腕浴を体験

終了後は天理市トレイルセンターにて有志によるランチ交流会も行われ、参加者同士の交流も深まる機会となりました。

参加者からは、「またこのような講座があれば参加したい」という声も聞かれ、好評のうちに終了しました。

## バドミントン 初中級編

体育学部体育学科 教授 中谷 敏昭

バドミントンはラケットとシャトルを用いて何回打ち続けられるか、試合で腕試しをするなど、たくさんの魅力があります。講座では、ストロークの基本となる運動を理解してけがなく楽しめる内容を用意しました。



- 事前申し込み要
- 受講料：3,000 円（シャトル代・保険料の実費）
- 会 場：天理大学体育学部キャンパス  
総合体育館（サブアリーナ）

### 2017年度

- 第1回 4月16日(日) 『ストロークの基本を学ぼう!』
- 第2回 4月30日(日) 『力強いストロークのための運動を覚えよう!』
- 第3回 5月14日(日) 『巧みなストロークを打てるようにしよう!』
- 第4回 5月28日(日) 『ゲームを理解してやってみよう!』
- 第5回 6月11日(日) 『ダブルスゲームに必要な技術を覚えよう!』
- 第6回 6月25日(日) 『ダブルスのフォーメーションを覚えよう!』
- 第7回 7月 2日(日) 『ダブルスゲームを楽しもう!』



### 2018年度

- 第1回 4月15日(日) 『ストロークの基本を学ぼう!』
- 第2回 4月29日(日) 『力強いストロークのための運動を覚えよう!』
- 第3回 5月13日(日) 『巧みなストロークを打てるようにしよう!』
- 第4回 5月27日(日) 『ゲームを理解してやってみよう!』
- 第5回 6月10日(日) 『ダブルスゲームに必要な技術を覚えよう!』
- 第6回 6月24日(日) 『ダブルスのフォーメーションを覚えよう!』
- 第7回 7月 1日(日) 『ダブルスゲームを楽しもう!』





# 天理大学公開講座

第10号

(2017年度／2018年度)

2020年3月発行

編集発行 天理大学広報委員会

天理大学広報・社会連携課